2023（令和 5）年度

２回生進級時アンケート報告書

京 都 大 学 国 際 高 等 教 育 院

目　次

1　調査の概要と目的 …… 1
2　回答者の属性と回答率 …… 2
3　志望意識と専門分野 …… 4
4　学習意欲 …… 8
5　大学教育での向上感 …… 12
6　ILAS セミナー・実習・実験科目の受講 …… 19
7　履修動向と成績 …… 25
8　成績評価への納得度 …… 31
9　学生生活 …… 34
10　期待の実現度 …… 41
11　教養・共通教育についての意見 …… 43
12　まとめ …… 49

【資料】2023 年度 2 回生進級時アンケート …… 52

１．調査の概要と目的

2回生進級時アンケートは、2003年度入学者を対象として2004年4月に初めて実施されて以来、長年に亘って学生の学習活動についての意識変化を追跡してきた。初期においては紙を媒体とした調査を行っていたが、2007年度からは京都大学で整備された教務情報システム（KULASIS）による回答方法を採用している。毎年の調査結果は国際高等教育院のホームページに掲載し、学内外に公表されている（URL：http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/introduction/inspection ）。

本調査の第一の目的は、学生が入学後1年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか、について2回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実させるための基礎資料にすることである。

本調査の第二の目的は、京都大学の教育活動に対する検証である。大学機関別認証評価 大学評価基準（平成16年10月制定；令和2年3月改訂）では、基準6-4、6-6、6-8 のそれぞれにおいて、「適切な授業形態、学習指導法が採用されていること」「公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていること」「適切な学習成果が得られていること」が謳われているが、授業評価アンケートや、新2回生、卒業生・修了生、就職先等関係者へのアンケート等の実施により、入学時から卒業時に至るいくつかの定点で学生意識の変化を調査することは、そのような検証の一環として有用である。2018年度からは、卒業生進路調査アンケートとの連携を図り、卒業時に尋ねた教養・共通教育に対する学生意識の結果を適時参照できるようになっている。

調査対象： 学部新2回生（2022年度入学生）全員

実施期間： 2023/04/03 ～ 2023/06/09

調査方法： KULASIS上でのアンケート回答方式。上記調査期間に新2回生が履修登録確認のため KULASIS にログインした際にアンケートへの協力願いを掲示し、回答フォームに入力する方式を採用。アンケート全文は末尾に添付している。

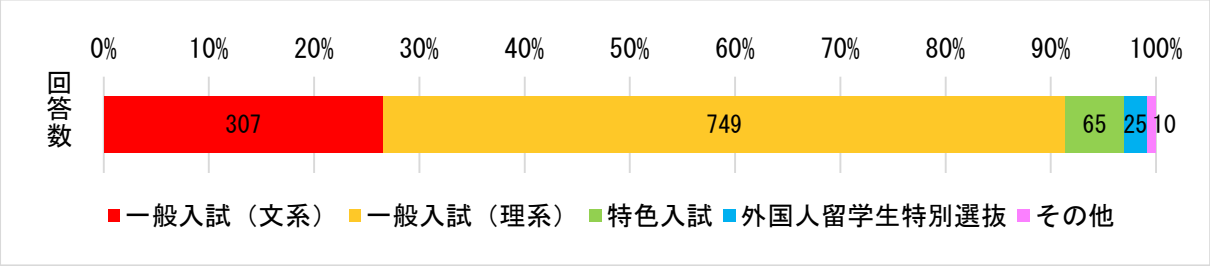
注 1）本報告書において文系・理系の区分をする場合、文学部、教育学部、法学部、経済学部、総合人間学部は文系学部に、理学部、医学部、薬学部、工学部、農学部は理系学部に含めている。
注 2）一般入試における文系・理系の区分は総合人間学部、教育学部、経済学部については募集区分による。その他の学部は注 1 と同様である。
注3）各設問において回答が空白の場合は、回答数より除いている。

２．回答者の属性と回答率

最初に回答者の属性に関する質問をし、アンケート全体での区分解析を可能にした。特に平成 29 年度から、学部別に加えて、一般入試入学者（文系・理系）、特色入試入学者、留学生の区分を設け、必要に応じて解析区分として採用した。

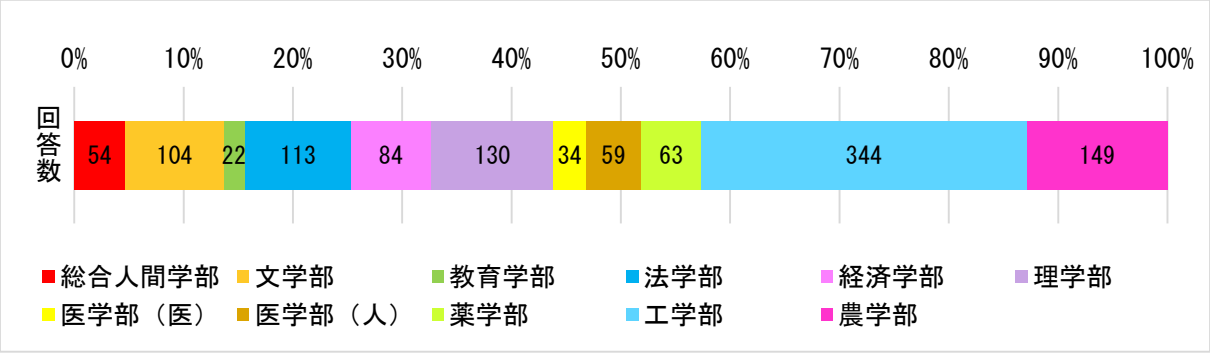
Q.01　あなたが京都大学に入学した入試区分は次のどちらですか。
①一般入試（文系）　②一般入試（理系）　③特色入試　④外国人留学生特別選抜　⑤その他*
＊「その他」には外国学校出身者、Kyoto iUP 生等を含む

＜図１　入試区分＞



Q.02　あなたの学部を教えてください。
①総合人間学部　②文学部　③教育学部　④法学部　⑤経済学部　⑥理学部　⑦医学部（医学科）
⑧医学部（人間健康科学科）　⑨薬学部　⑩工学部　⑪農学部

＜図２　学部＞



＜表１　学部別アンケート回答者数・回答率＞

学部	学年在籍者数	回答者数	回答率	文理
総合人間学部	125	54	43.20%	38.04%
文学部	231	104	45.02%	
教育学部	61	22	36.07%	
法学部	329	113	34.35%	
経済学部	245	84	34.29%	
理学部	325	130	40.00%	40.59%
医学部	218	93	42.66%	
薬学部	86	63	73.26%	
工学部	979	344	35.14%	
農学部	311	149	47.91%	
合計	2,910	1,156	39.73%	

（2 回生在籍者数：2023/4/1 時点）

学部別のアンケート回答者数ならびに回答率を表１に示す。各学部に新２回生ガイダンス等でのアンケート調査協力をお願いし、また KULASIS にて再々回答を促したが、本年度の回収率は 39.7%(1,156 名)となり、昨年度の 40.7%より 1.0 ポイント減少した。学年在籍者の半数にも満たない回答に基づいた解析ではデータの信頼性という観点、さらには教育改善への取組という意味においても大いに問題であり、来年度以降も継続して改善策を講じる必要がある。

＜表２　学部別アンケート回答率の変遷＞

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	(*)平均回答率
総人	30.1%	30.6%	36.7%	57.8%	59.2%	48.0%	54.5%	37.7%	22.5%	34.7%	20.0%	31.2%	15.7%	28.2%	34.9%	37.2%	37.6%	48.8%	43.2%	43.2
文学	26.9%	25.6%	28.6%	50.5%	50.2%	49.8%	49.8%	41.3%	23.7%	30.4%	29.8%	28.9%	29.6%	37.9%	32.7%	47.5%	34.5%	48.0%	45.0%	42.5
教育	34.9%	29.2%	35.5%	37.7%	37.7%	44.3%	42.6%	32.8%	23.3%	26.2%	22.6%	17.7%	28.1%	29.5%	25.8%	54.8%	27.9%	45.9%	36.1%	36.6
法学	19.3%	16.8%	30.4%	44.1%	44.4%	42.6%	42.4%	30.2%	17.8%	31.7%	25.9%	18.8%	19.2%	25.0%	33.7%	34.9%	30.4%	36.6%	34.3%	33.8
経済	14.8%	12.9%	25.4%	37.3%	36.3%	37.5%	42.3%	44.8%	21.3%	31.0%	24.6%	19.8%	14.2%	20.9%	31.9%	32.5%	41.4%	35.7%	34.3%	37.1
理学	30.1%	29.9%	38.1%	49.4%	50.2%	58.0%	53.3%	45.9%	29.9%	35.2%	33.2%	28.8%	29.2%	35.6%	34.7%	52.4%	38.0%	43.0%	40.0%	40.3
医学	39.7%	25.7%	20.1%	33.3%	37.2%	34.6%	35.3%	32.7%	15.9%	26.4%	22.1%	21.3%	16.9%	22.3%	43.7%	38.6%	48.6%	42.8%	42.7%	44.7
薬学	25.8%	19.1%	35.6%	55.2%	57.8%	51.8%	52.3%	56.0%	30.5%	50.6%	34.5%	39.3%	32.2%	82.6%	62.1%	56.3%	79.8%	86.9%	73.3%	80.0
工学	74.7%	33.7%	35.5%	45.6%	45.2%	44.5%	50.3%	41.5%	23.2%	36.6%	23.4%	25.4%	20.8%	31.6%	29.7%	40.3%	35.8%	35.4%	35.1%	35.4
農学	19.5%	23.8%	34.1%	45.2%	46.1%	46.7%	50.2%	39.6%	26.6%	34.2%	32.8%	23.4%	19.5%	35.5%	44.1%	63.8%	55.0%	39.8%	47.9%	47.6
全体	41.8%	26.5%	32.2%	44.9%	45.5%	45.2%	47.7%	40.1%	23.1%	33.9%	26.4%	24.7%	21.4%	31.9%	34.8%	43.9%	39.9%	40.7%	39.7%	40.1

（＊1)2021年～2023年の３年間の平均提出率
（＊2)黄色は回答率上位２学部、青は回答率下位2学部

表２には、2005年度（平成17年度）以降の学部別アンケート回答率の変遷を示した。最近3年間の平均回答率を見ると、80%を超える高い学部（薬学）から、30%台の低い学部(教育、法学、経済、工学）まで大きな差があり、全体、文系、理系として集計するときは、回答率の差による影響を受けることに留意されたい。

３．志望意識と専門分野

本学はホームページやパンフレット、オープンキャンパス等のさまざまな方法により、各学部の学術分野、教育内容、学生生活等を広報し、入学者に期待する資質をアドミッションポリシーとして公開している。入学試験という関門を通過して京都大学の各学部に入学した学生は自らが志望する分野を選択しているはずであるが、将来の活躍分野をどこまで具体的に意識しているか、またそれが学習の動機付けに結びついているか、は入学後の教育効果を大きく左右するものと思われる。つまり、

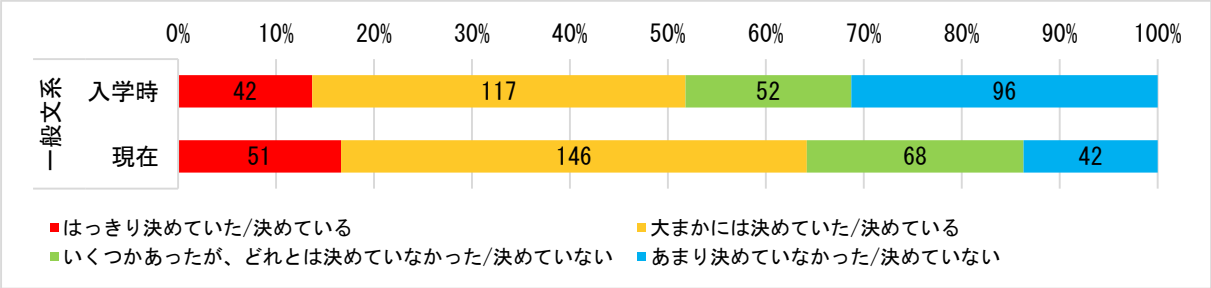
志望意識 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習効果 → 向上感（満足度）

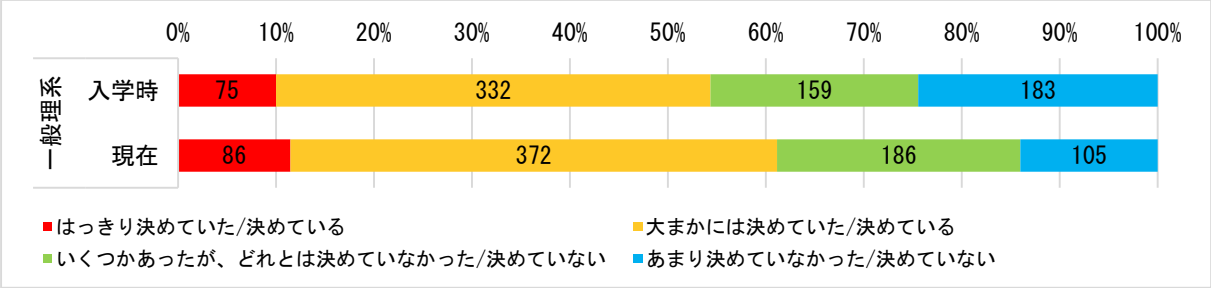
の正の連鎖を期待する。一方、その志望意識とこれから学ぶことになる専門分野との一致度が良くない場合は、負の連鎖を起こす恐れがある。アンケートの初めにこの重要点について Q.03～Q.06 で把握し、以後の学習行動や学習効果との相関を考察した。

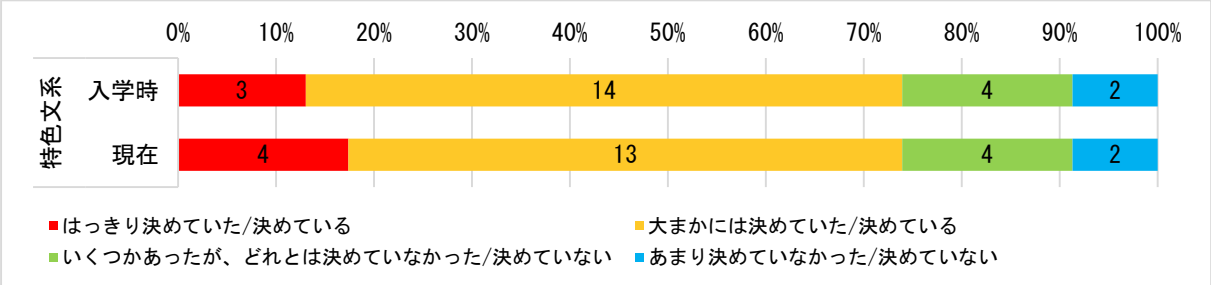
Q.03　あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていましたか。
①はっきり決めていた　②大まかには決めていた　③いくつかあったが、どれとは決めていなかった
④あまり決めていなかった

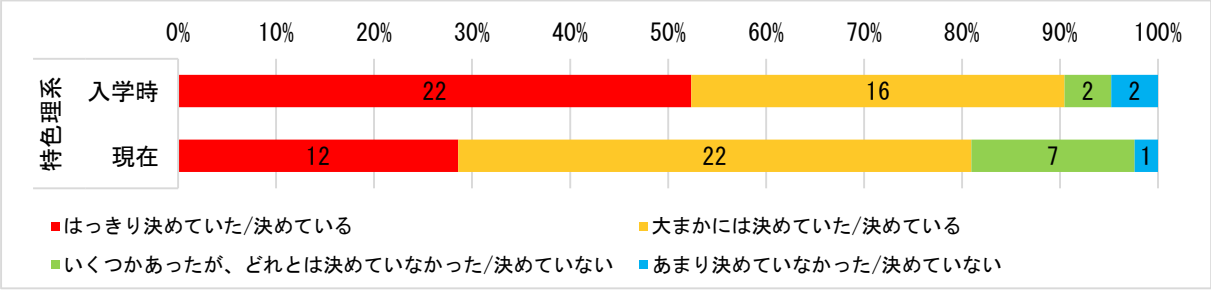
Q.04　今現在、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていますか。
①はっきり決めている　②大まかには決めている　③いくつかあるが、どれとは決めていない
④あまり決めていない

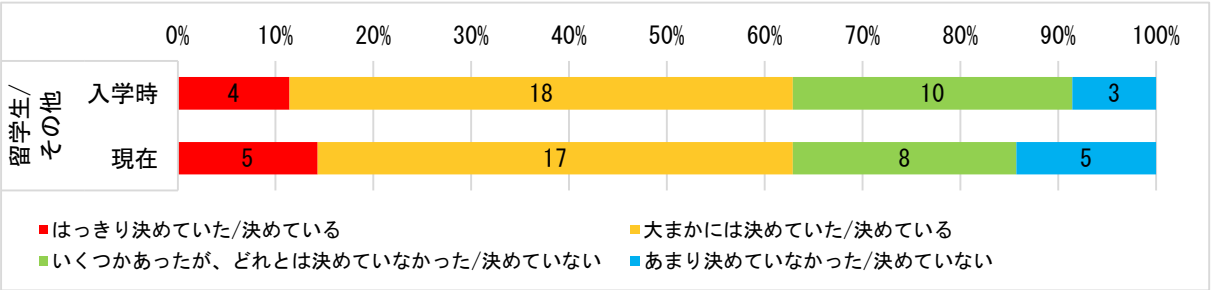
＜図３　志望意識・入試区分別＞











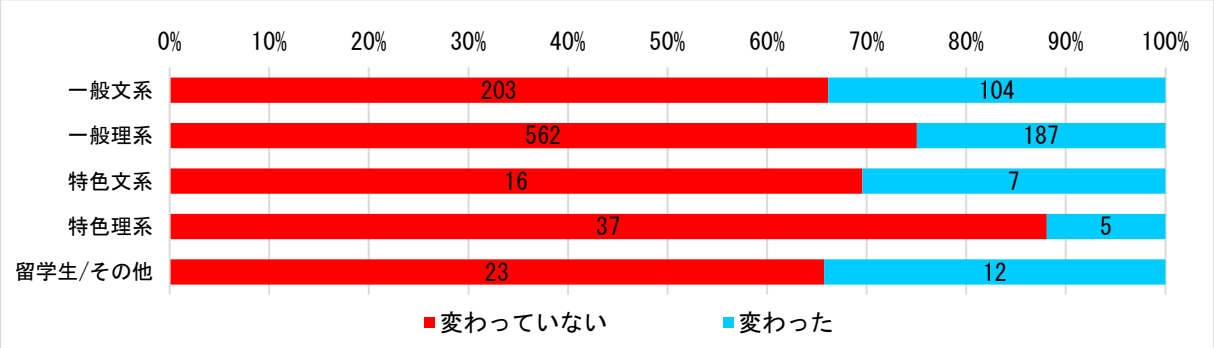
Q.03 と Q.04 は入学時と 1 年後の現在で、志望意識を尋ねた質問である。平均として、一般文系、一般理系とも 15%前後の「はっきり決めている」を含む 60%以上の学生が将来活躍したい分野を「(大まかには）決めている」。また、約 15%は現在でも「あまり決めていない」と答えている。専門分野の中で具体的な活躍希望分野がイメージできていないということかも知れないが、専門分野そのものに志望意識をもてない場合は、今後の勉学のモチベーションを保てるかという不安が残る。この点は Q.06 で確かめることになる。

Q.03 と Q.04 を比較すると、全体として例年のように、1 年後の現在の方が「はっきり決めている」と「大まかには決めている」の回答合計がやや増加する傾向にある（特色理系を除いて)。一方、これまでと比較して、「あまり決めていない」が（一般文系：30→19→15→24→14%、一般理系：22→18→18→15→14%）と減少傾向で、かつ入学後に次第に志望意識が明確になるという好ましい傾向を示している。

一般入試と特色入試の入学者を比較すると、特色入試制度の趣旨を反映して「(大まかには）決めている」の比率が特色入試区分では各段に大きくなる傾向にある。しかし理系の特色入試では、「はっきり決めている」あるいは「大まかには決めている」の比率が入学 1 年後に 10～20%程度減少する傾向が続いている。特色入試の区分では回答数が少ないが、平成 28 年度の「京都大学特色入試」導入時以来の傾向であり、その原因や制度の意義を分析すべき時期がきていることを示唆する結果である。留学生の区分のデータも回答数が少ないが、一昨年大きく低下した志望意識（「はっきり決めている」「大まかには決めている」が約 50%）が、昨年今年はそれ以前のレベル（約 60～70%）近くに戻っている。

Q.05　入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。
①変わっていない　②変わった

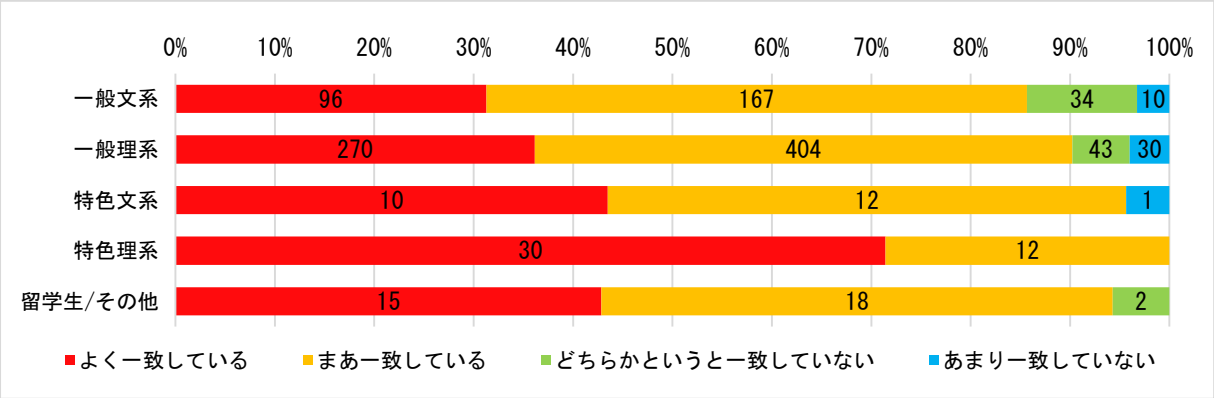
＜図 4　希望分野の変化・入試区分別＞



Q.05 では、１年間の大学生活を経て、志望分野が変化したかどうかを尋ねている。図 4 には入試区分別の結果を示したが、一般文系と比較して一般理系学生では約 9%ではあるが志望変化が少ないことが分かる。Q.03、Q.04 では、特色理系の志望意識の変化の違いに注目したが、ここでは希望分野が変わったのは約 10%に過ぎず、他の区分よりも少ない。こちらも含めて詳細な分析が必要であろう。留学生区分での「変わった」と答えた学生の比率は、年々のばらつきが大きく、今年はどの区分よりも多い。

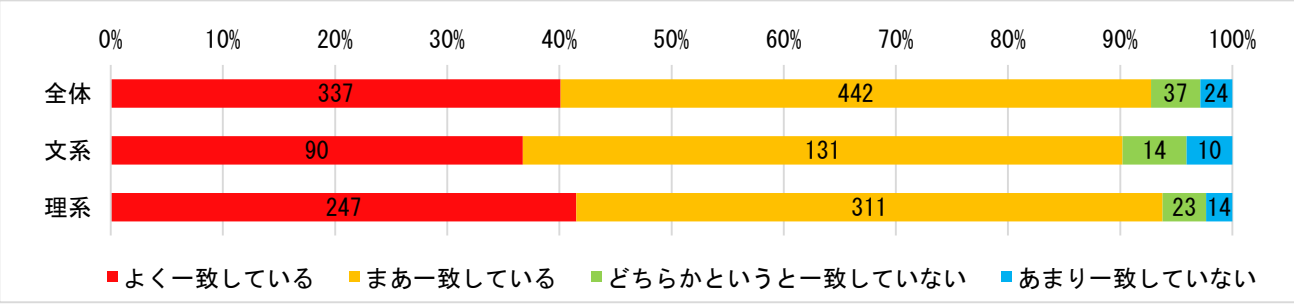
Q.06　現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。
①よく一致している　②まあ一致している　③どちらかというと一致していない
④あまり一致していない

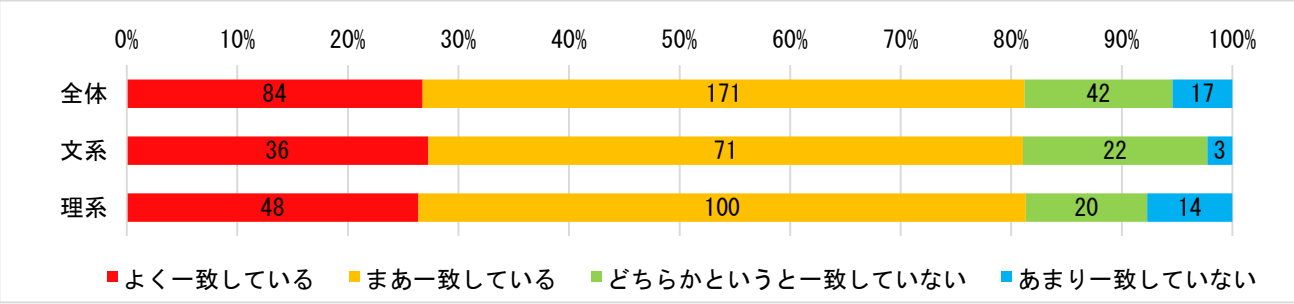
＜図 5　希望分野と専門分野の一致度・入試区分別＞



１年間の学習経験と大学生活を経て、自らの希望分野とこれから学ぼうとする専門分野との一致度について学生がどのように思っているか、を尋ねた。この段階で「どちらかというと一致していない」、「あまり一致していない」は好ましくない回答である。一般入試の文系・理系ともその比率は 10～15%程度にとどまり、大半の学生が「よく一致している」、「まあ一致している」と回答していることは良い結果といえる。

＜図 6　上：希望分野が「変わっていない」と回答した学生、下：「変わった」と回答した学生＞





次に、Q.05 で希望分野が「変わっていない」と「変わった」と答えた学生の区分ごとに、一致度の解析を行った。「変わっていない」と答えた学生の専門一致度は高く、全体では 90%を超えている。一方、「変わった」と答えた学生の区分では「(よく・まあ）一致している」の回答が文系理系ともに 80%を超えており、より一致度が良くなる方向に学生の意識が変化していることを示している。ただし、希望分野が変わっていないと答えた学生の約 10%、変わったと答えた学生の約 20%が（どちらかというと・あまり）一致していないと回答している点は気がかりな点である。

４．学習意欲

Q.07～Q.11　入学当初から現在までに、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。各時期について、次の５つから選択してください。なお、この質問は Q.7～Q.11（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）まであります。

Q.07　＜入学当初の時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

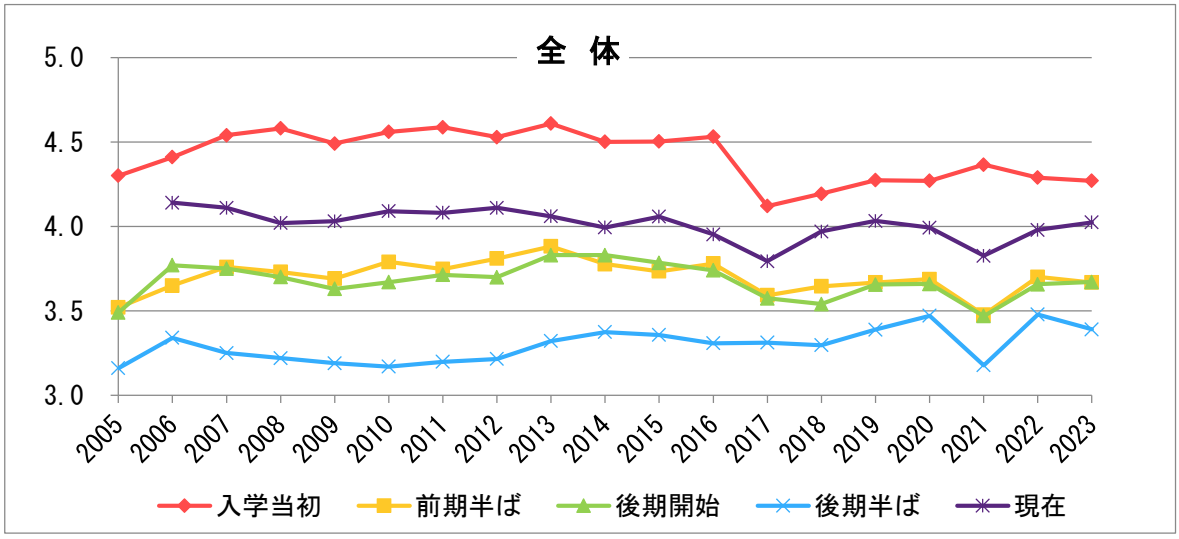
Q.08＜前期半ばの時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

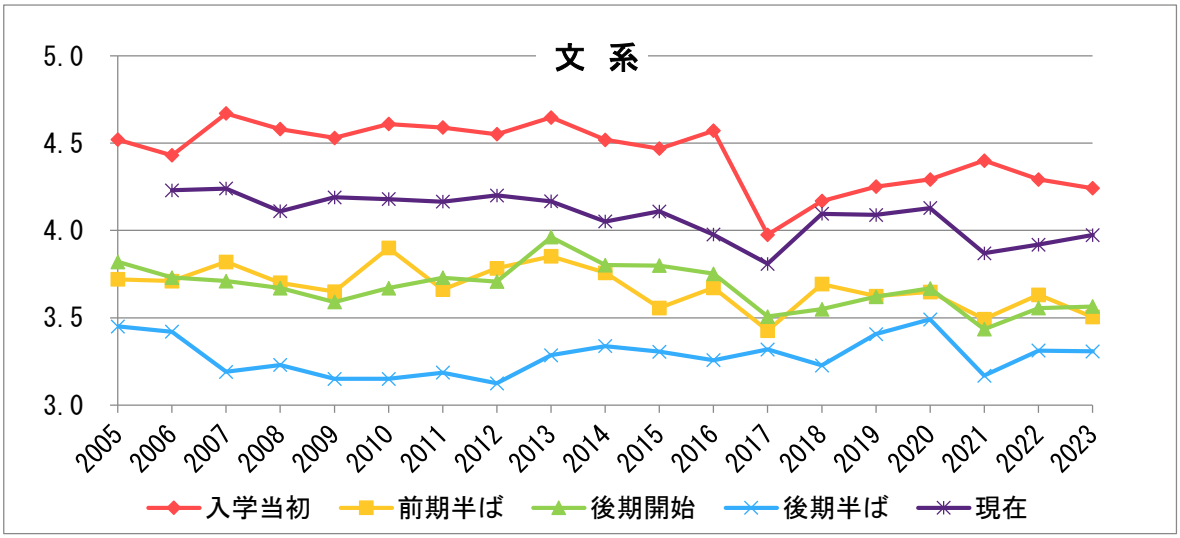
Q.09＜後期開始の時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

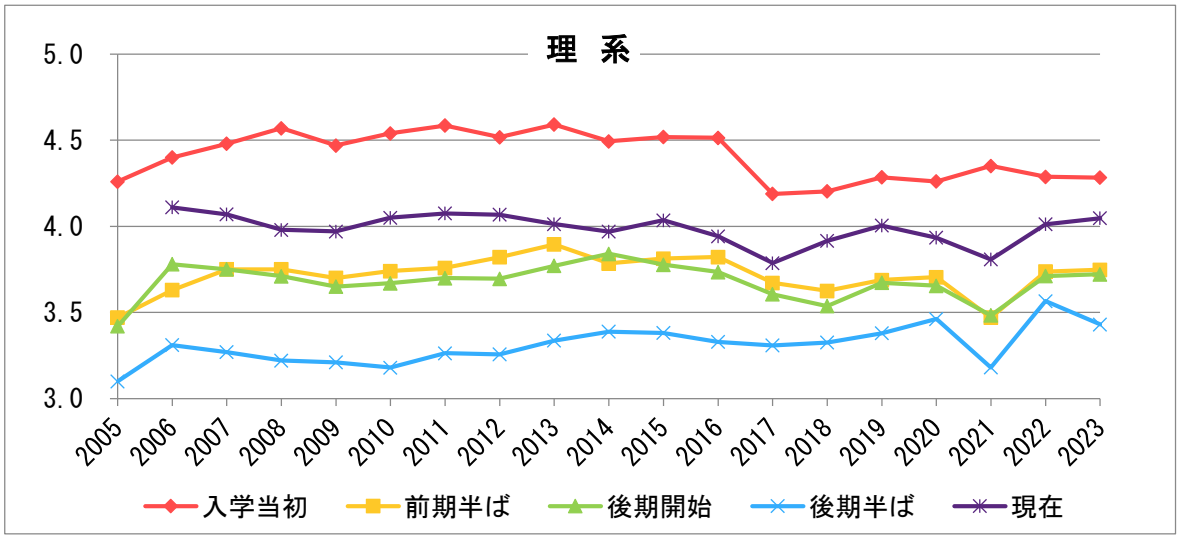
Q.10＜後期半ばの時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.11＜現在＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

＜図７　学習意欲の経年変化（2005-2023 年）＞







学習意欲については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。経年変化を見るために、学習意欲を数値化してその平均点を各時期（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）についてプロットした。ここで、数値化は、「①非常に意欲あり」を 5 とし、「⑤まったく意欲なし」を 1 とした。なお、本アンケートは主に 4 月の回答なので、コロナ感染対策によるオンライン授業の影響は 2021 年前期半ば以降の回答に含まれていると考えられる。

図 7 に示したように、入学当初の高い学習意欲から、次第に低下して後期半ばで底になり、2 回生新学期で回復するという傾向は長年同じである。文系、理系ともに、それまでと比較して 2021 年は値が 0.2～0.3 ほど低下したが、昨年今年とほぼ 2020 年の値に回復している。2021 年の前期半ばから現在までの 4 時期の値のほとんどが 2006 年以降で最低値となっており、コロナ禍のオンライン授業の影響が大きかったと考えられるが、その影響は一年限りであった。特に理系の回復が著しい。

（注）2017 年度調査で入学当初の意欲値が以前より大きく低下した理由は、それまでは学生が回答するに当たり自身が入学時に記入した抱負や期待を読む欄を設けていたので回想効果があったが、2017 年度よりこれを廃止したためと思われる。

＜図８　学習意欲の変化・全体比率　2023 年度＞

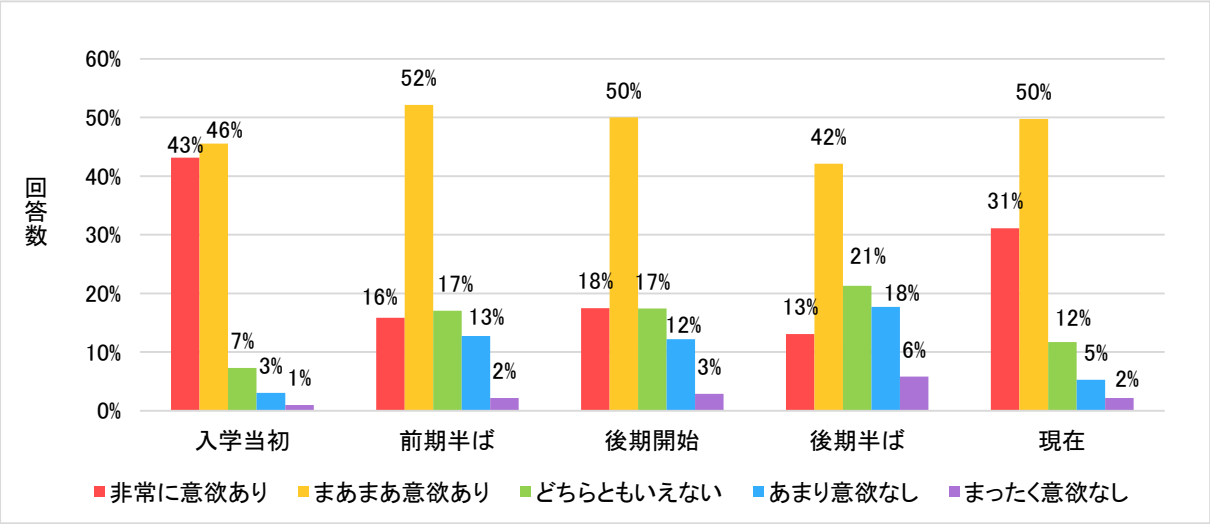
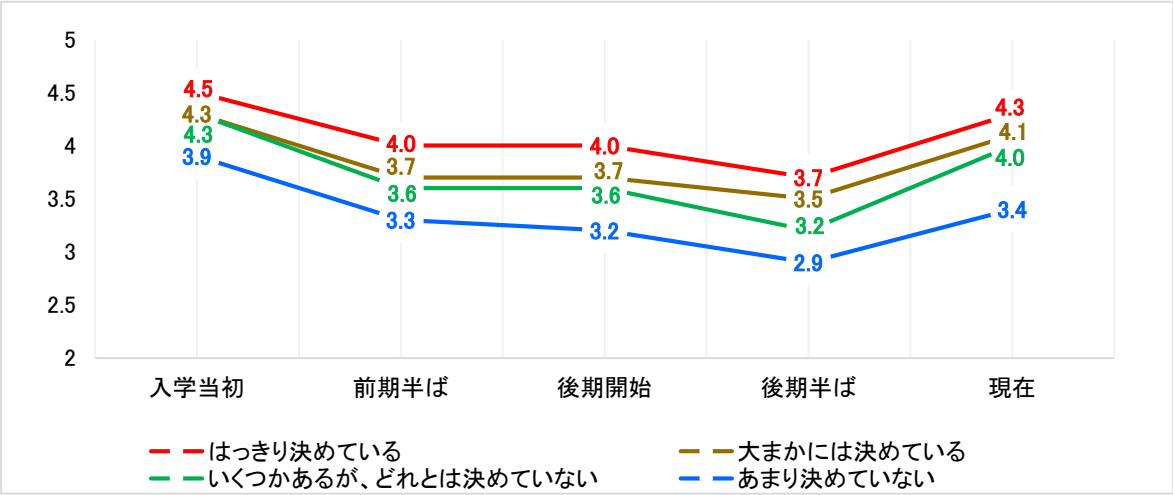


図8は学習意欲分布の時期的な推移を示している。全体的には、入学当初の高い学習意欲が次第に低下して後期半ばで底になり、２回生新学期（現在）である程度は回復するという傾向を繰り返している。赤の「非常に意欲あり」が前期半ばで激減するのは致し方ないとしても、青・紫の「あまり意欲なし」「まったく意欲なし」が時間を追って増加するのは嘆かわしい傾向である。１回生での意欲低下をいかに防ぎ、２回生につなぐことができるかが引き続き大きな課題である。教養・共通教育として共通の対策が求められるが、そのヒントになる解析結果を以下に示す。

＜図９　学習意欲の変化　志望別＞



＜図 10　学習意欲の変化　一致度別＞

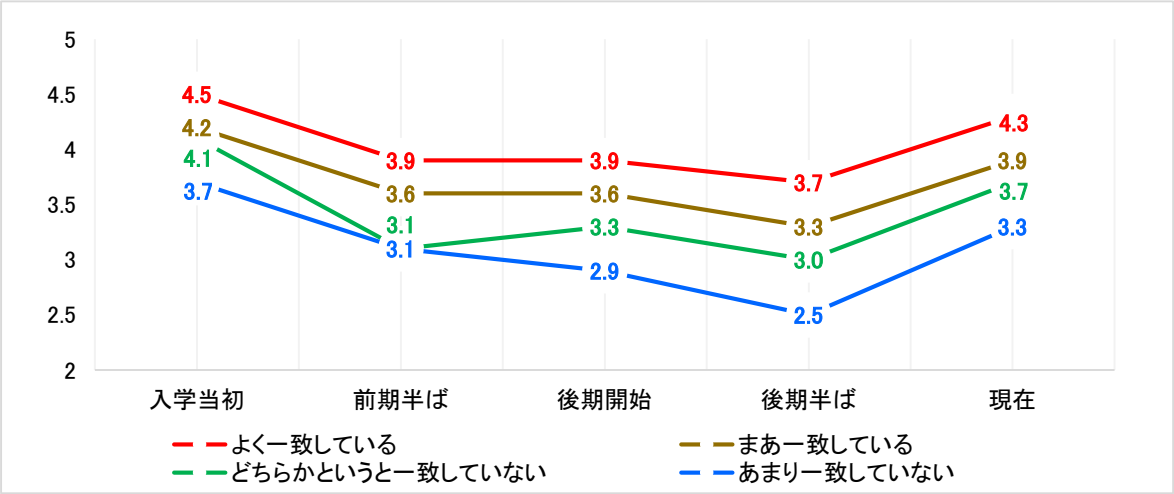


図 9 は Q.04 志望意識の回答群別に、学期ごとの数値化した学習意欲の平均値を図示したものであり、図 10 は同様に Q.06 一致度の回答群別に、学期ごとの学習意欲の平均値を図示したものである。志望意識の有無、および、希望分野とこれから学ぼうとする専門分野の一致度が、学生の学習意欲にどの程度の影響を与えているかを見ることができる。

図 9 からは、入学後のどの時期においても、志望意識の有無により学習意欲に明確な差がでていることが分かる。「あまり決めていない」グループは、他と比べて当初より学習意欲が低く、学期ごとの意欲低下が著しく、そして、2 回生になっても回復度が低い。また、図 10 からは、希望分野と専門分野の一致度の度合いに依存して、入学当初からの学習意欲が分かれ、その低下の度合いや回復度にも差があることが分かる。入学当初において各回答群ですでに差がある（3.7~4.5）が、1 年が経過して 2 回生になっても回復力が弱く、各回答群で、より大きな差（3.3~4.3）となって残っている。

予想されたように、学生が抱くこの二つ意識が、極めて明瞭に、入学後の学習意欲に大きな影響を与えており、志望意識 → 学習意欲 の悪循環を示す結果である。後述するように、学習意欲の低下は大学生活全般に波及するところであり、今後とも注視して対策を講じていく必要がある。

５．大学教育での向上感

入学後１年間の大学での学習を経て、学生が自己能力の向上についてどのような意識をもっているかをいくつかの要素能力について質問した。ここでは、「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」、「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」、「専門分野で基礎となる学力」、「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」、「自ら考え、主体的に行動する能力」、「英語の能力」の６つの能力について Q.12～Q.17 で尋ねた。これらは多くの学部のカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに関連する項目であることから、学生が卒業するまでに「専門知識の向上」を含めて高い向上感を得られることが、教育効果の検証として重要となる。

Q.12　入学後 1 年間の授業を受けて、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.13　１年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

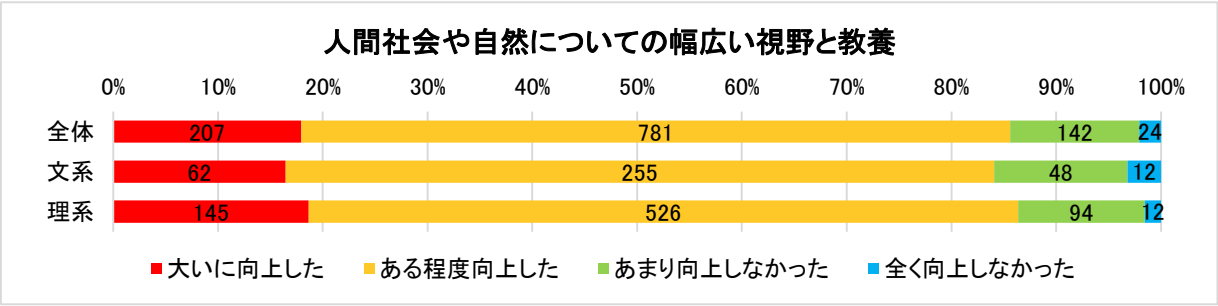
Q.14　１年間で、あなたの専門分野で基礎となる学力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

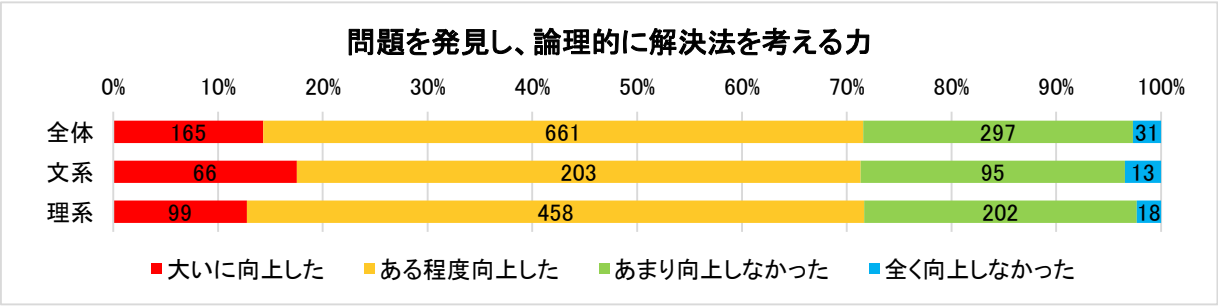
Q.15　１年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

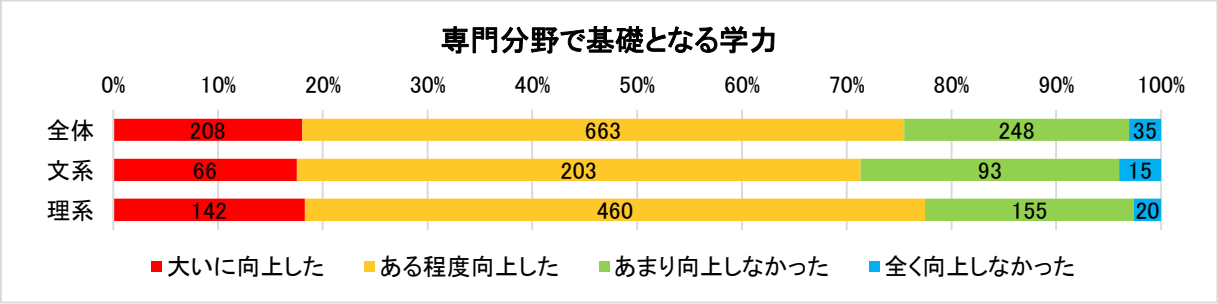
Q.16　１年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

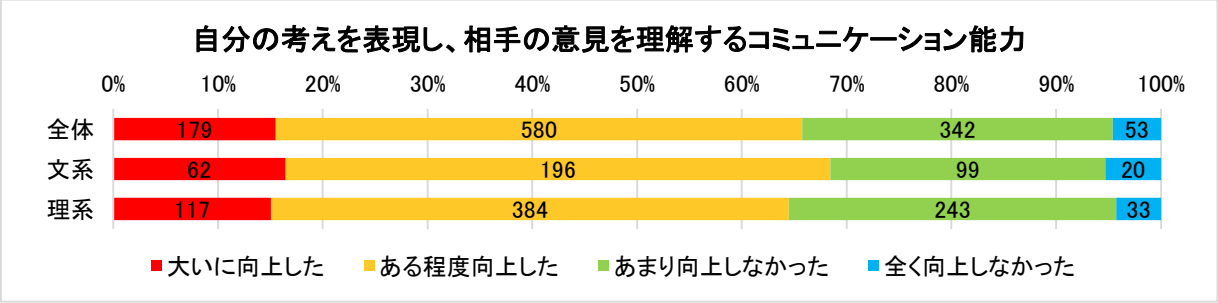
Q.17　１年間で、あなたの英語の能力（英語以外の言語を第１外国語とした方は、その言語の能力）はどの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

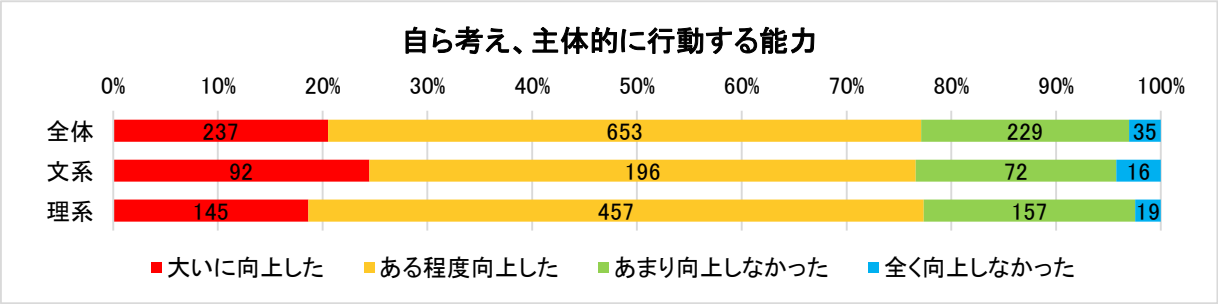
＜図 11　大学教育での向上感　各要素別＞











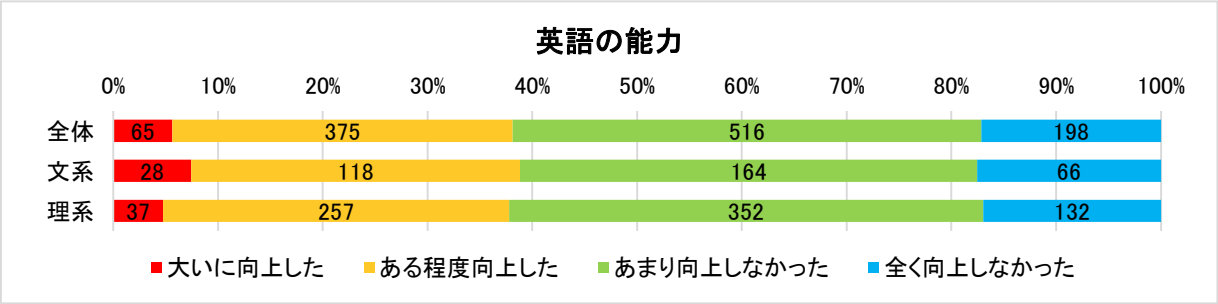


図 11 は各要素能力について全体、文系・理系別の回答比率を図示している。「大いに向上した」、「ある程度向上した」の肯定的意見と、「あまり向上しなかった」、「全く向上しなかった」の否定的意見の比率に着目すると、全体の概観としては肯定的意見がこの 5 年間で次のように推移してきた：

「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」：78％→82％→75％→84％→86％

「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」：68％→69％→62％→70％→72％

「専門分野で基礎となる学力」：70％→69％→68％→77％→76％

「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」：62％→69％→47％→67％→66％

「自ら考え、主体的に行動する能力」：76％→75％→62％→75％→77％

「英語の能力」：37％→44％→37％→42％→38％

―昨年度（下線付き）はコロナ禍の影響もあり「コミュニケーション能力」「主体的に行動する能力」の比率がそれぞれ約 2 割～1 割以上の減で他の要素能力も減少していたが、今年度はそれ以前に近い値あるいはそれを越える値に戻っている。

教養・共通教育としては、「幅広い視野と教養」と「主体的に行動する能力」の向上感が高いことは良い結果であり、前者が 86%とこれまでで最大となったことは好ましい。「専門分野で基礎となる学力」、「問題発見・論理的解決力」、「コミュニケーション能力」も肯定的意見が 70%前後あるが、これらに対して、「英語の能力」についての向上感は、2016 年度入学生から E 科目制度を導入して英語改革を進めているにも関わらず、全体での肯定的意見は 40%前後で推移してきており、今年度は 38%に戻っている。英語は初等・中等教育で長年学んできており、他の質問事項と同列に見るべきでないかもしれないが、ここでもう一度教養・共通教育の英語科目カリキュラムを分析し、英語への関心や英語に触れる機会を増加させることで向上感・達成感が得られる仕組みを検討することが必要であろう。

2017 年度卒業生から卒業時アンケート（3 月実施）において、全学共通教育についての意識を問う設問を加えていただいた。これにより入学時の期待度からスタートし、2 回生進級時の実現度、満足度、そして大学生活 4 年間の総括としての全学共通教育の効果に関する意識を一連のデータで観察できるようになった。

以下に卒業時アンケートから全学共通教育での学習に関する 5 項目についての調査結果を転記する。

【参考資料】2022 年度卒業生進路調査アンケート結果より転載

全学共通科目の学習を振り返って、入学当初と比べて以下の項目はどの程度向上した又は得られたと思いますか。

（1）専門以外の幅広い知識・教養

①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

（2）専門分野で基礎となる学力

①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

（3）英語の能力（英語以外の言語を第 1 外国語とする人はその言語能力）

①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

（4）初修外国語の能力（外国人留学生については日本語の能力）

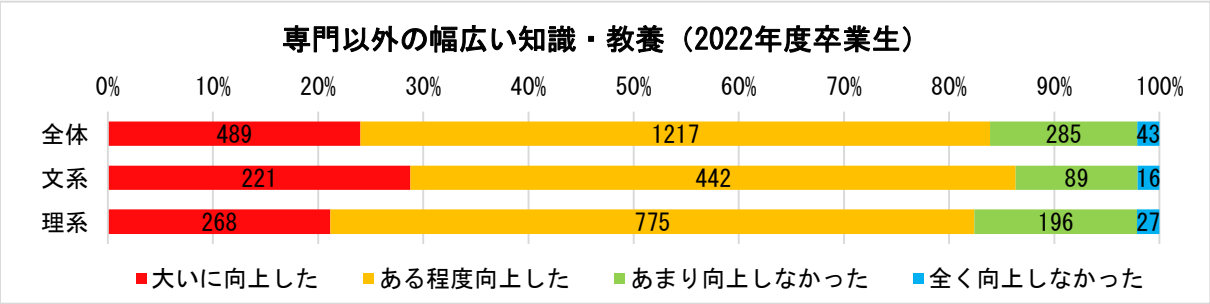
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった
⑤初修外国語は修得しなかった

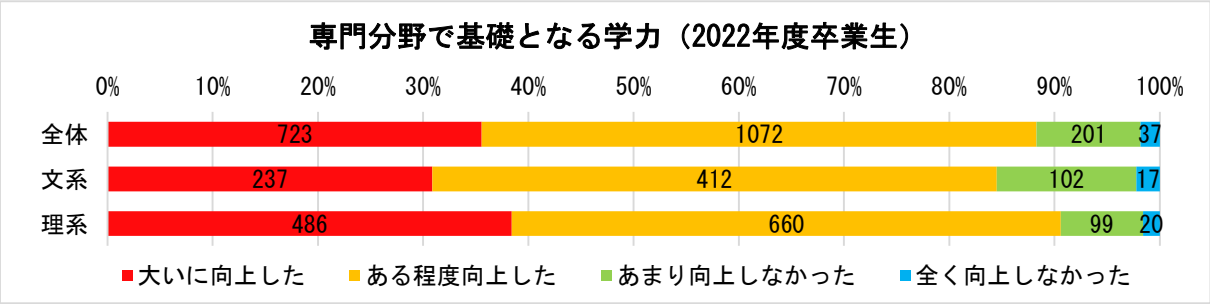
（5）将来の研究分野や進路を決める手がかり

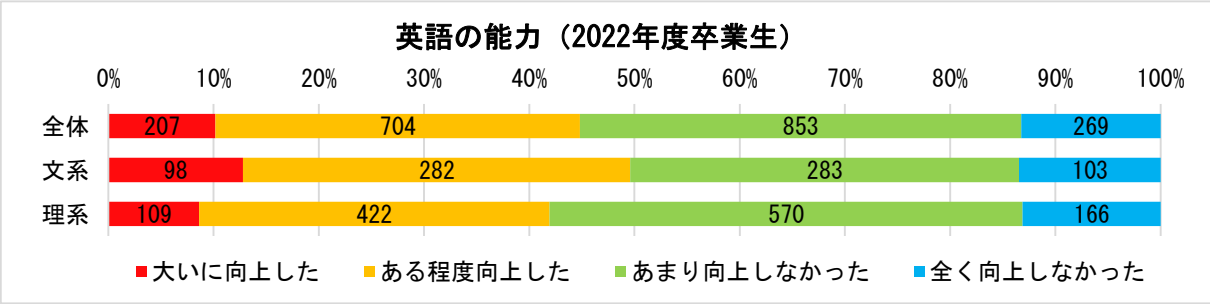
①大いに得られた　②ある程度得られた　③あまり得られなかった　④全く得られなかった

※医（医）は設問なし

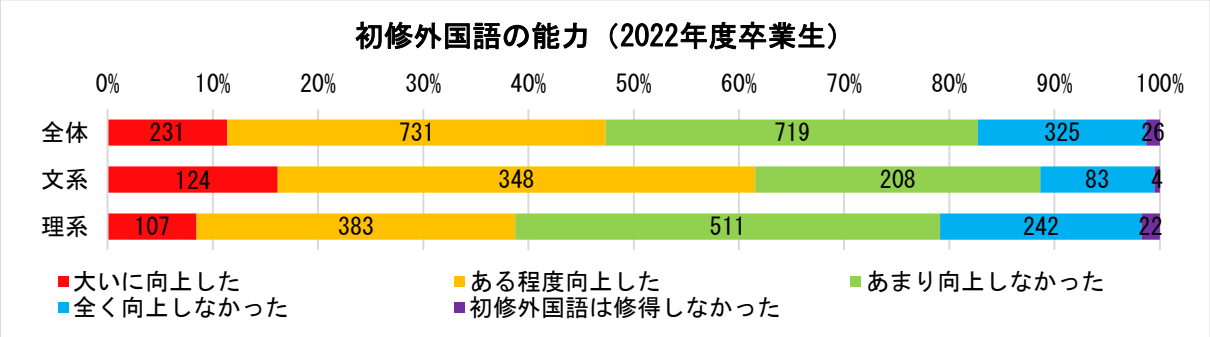
＜図 12　卒業生進路調査アンケート結果（要素別）　全学共通科目関連抜粋＞



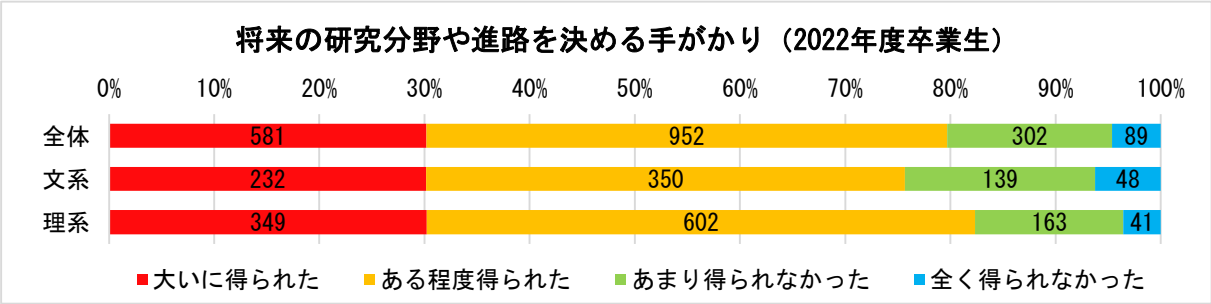




＊英語以外の言語を第１外国語とした方は、その言語の能力



＊＊外国人留学生については日本語の能力



医（医）は設問なし

この中で、（１）専門以外の幅広い知識・教養、（２）専門分野で基礎となる学力、（３）英語の能力の３項目は、２回生進級時アンケートと共通であることから、回生による向上感の変化をみることができる。ただし、2023 年 3 月在籍の 4 回生（主として 2019 年度入学生）と、2023 年 5 月在籍の 2 回生（主とし

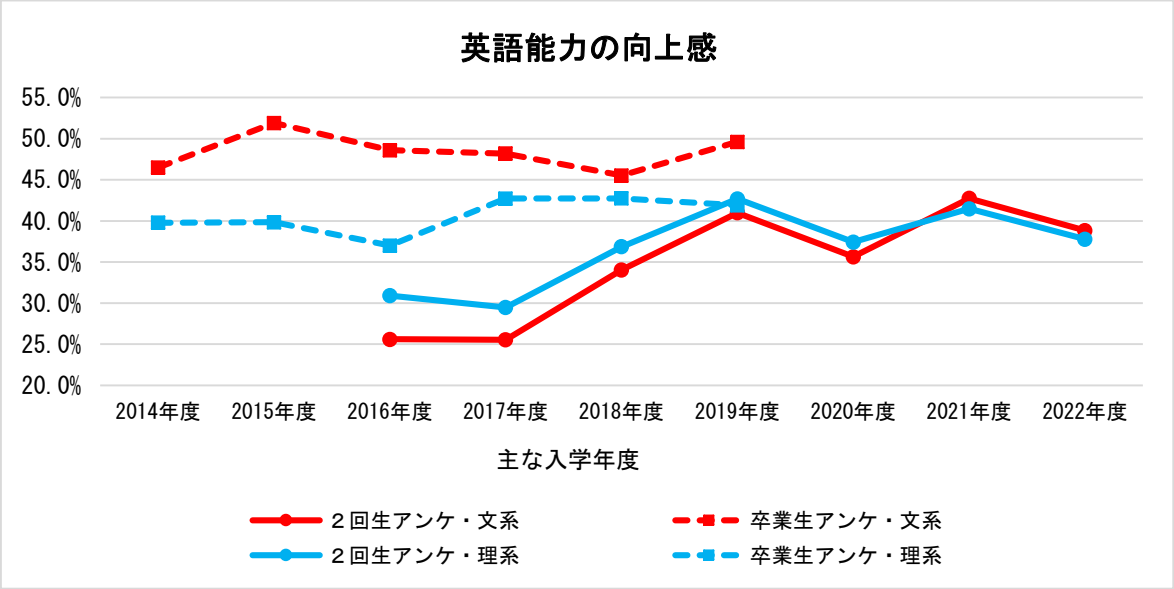
て 2022 年度入学生）の意見であることから、ほぼ同一のカリキュラムで教育を受けた学生群の意見変化ではあるが、同一群の 3 年間（2 回生→4 回生）の意見変化を示すものではない。

概観すると（1）幅広い知識・教養では、2 回生も 4 回生も「大いに向上した」、「ある程度向上した」の肯定的意見が 80 数%であり、回生による変化はあまりないと言える。しかし（2）専門分野の基礎では 2 回生の肯定的意見が約 75%であるのに対して、4 回生では全体で 90%近い肯定的意見であり、専門教育を修了した段階の方が基礎教育の意義をより自覚できるのではないかと思われる。

（3）の英語能力では、やはり卒業時でも肯定的意見が 40%台で、他の調査項目と比較して低くなっている。これは文系・理系間あるいは学部ごとのばらつきも大きい項目であり、E 科目を含む要卒単位など学部ごとのカリキュラム設定との関連を含めて詳細まで注視し、今後の改善策を検討していく必要があると考えられる。ほぼゼロからスタートする初修外国語のグラフでは文系・理系間のばらつきがさらに大きく、文系では肯定的意見が 60%以上であるのに対して、理系では 40%以下であり、文系と理系、あるいは学部ごとのカリキュラムの差が向上感の差となって表れていると考えられる。

◇英語の能力の向上感について、2 回生進級時アンケートと卒業生アンケートを比較

＜図 13　英語能力の向上感＞



毎年のアンケート結果を継続して表示するため、図 13 に、回答者の主な入学年度を横軸にして、文系と理系の英語能力の向上感（肯定的意見の%）の経時変化を示した。実線で示した 2 回生進級時アンケートで顕著なことは、前述したように、ここ数年の英語能力の向上感の増加である。文系（赤）も理系（青）も主な入学年度が 2016 年度、2017 年度と比較して、2018 年度、2019 年度と向上感が増加している。2020 年度はおもにコロナ禍の影響で約 5%減少したと思われるが、昨年度は 2019 年度のレベルに戻り、今年度はやや低くなっている。前述のように、本学では英語教育の充実を目指して 2016 年度に E 科目制度を主とした英語教育改革を実施し、向上感の値が 10%ほど高くなったが、2019 年度以降は文系理系ともに頭打ちの状況である。

もう一つ特徴的なことは、点線で示した 4 回生卒業時アンケートでの向上感が 2 回生進級時よりさら

に伸びていることである。2016 年度～2019 年度に入学した 4 年度分の同一学生群について、3 年後の向上感の増加を実線と破線の対比として見ることができる。 2 回生進級時アンケートでの英語能力の向上感の増加期に入った 2018 年度でも、文系理系ともに向上感が 5～10%程度増加したが、2019 年度入学生については、文系では 10%近い伸びがあるものの、理系では伸びていない。同一群の向上感増加の経年変動についてこれからも継続して注視していきたい。

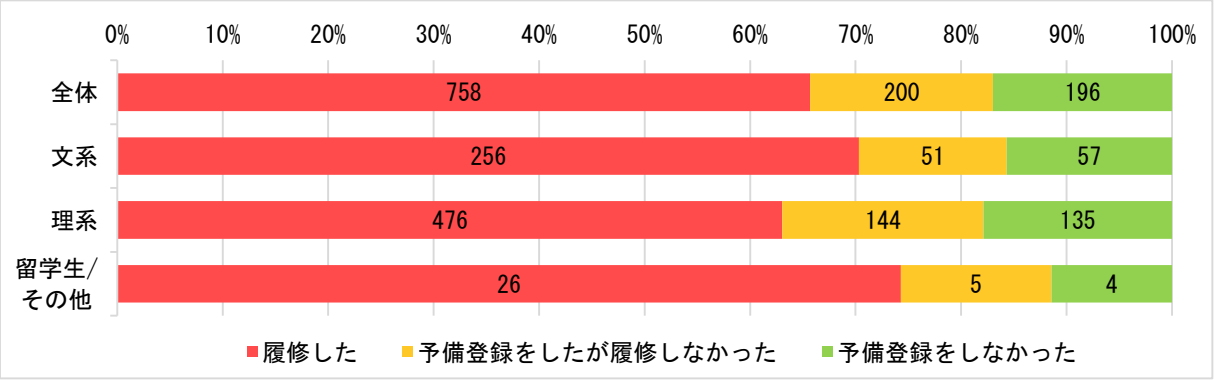
　他の項目と比較して「英語の能力」についての向上感が限定的であることは、英語教育改革の内容と実績についてここでもう一度分析を行い、英語への関心や英語に触れる機会を増加させることで向上感・達成感が得られる仕組みを検討するなど、さらに改革を進めていく必要性を示唆している。

6．ILAS セミナー・実習・実験科目の受講

1998 年度に始まる新入生向け少人数セミナー（通称：ポケット・ゼミ）は、開始以来開講数が大幅に拡大して現在の ILAS セミナーに至っている。ILAS セミナーは、主に新入生を対象に、「ILAS セミナー」、「ILAS Seminar-E2」、「ILAS セミナー（海外）」の 3 種類が開講されている。（来年度から「ILAS セミナー（海外）」はキャリア形成科目群・多文化理解分野へ移行される。）各学部・研究科・研究所・センター等の教員と学生との差向かいのゼミナール形式で、様々なテーマを扱った少人数の授業として企画され、入学当初の重要な初年次教育と位置づけられている。2023 年度前期においては 235 科目が開設され、受講定員 2,655 名、受講申し込み者数 2,543 名、受講許可者数 2,231 名であり、これらは昨年度とおよそ同数であった。入学者（2,898 名）に対する受講申し込み率、申し込み者に対する受講決定率はそれぞれ 87%程度で推移しており、結果として入学者に対する受講許可率は約 77%となっている。その理由を調査して今後の改善策を検討することが目的である。

Q.18　1 回生で ILAS セミナーを履修しましたか。
①履修した　②予備登録をしたが履修しなかった　③予備登録をしなかった

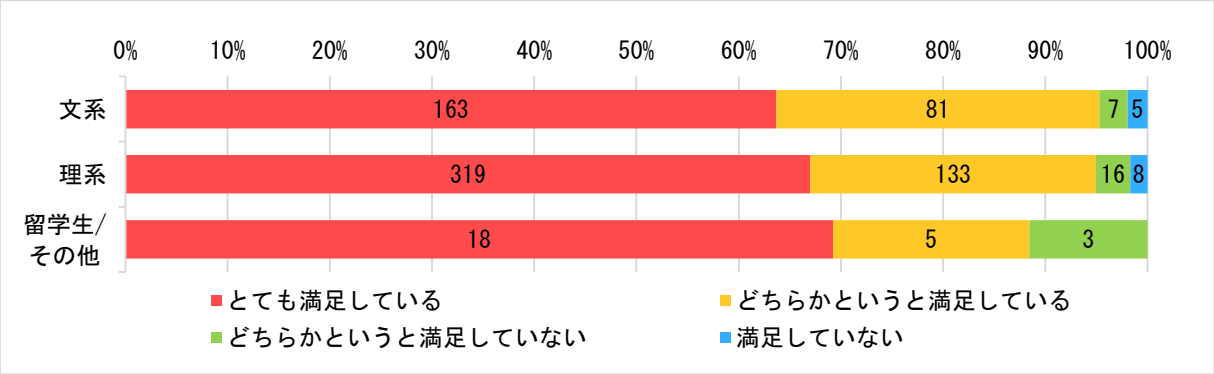
＜図 14　ILAS セミナーの受講＞



Q.18 では、受講の有無を尋ねた。「ILAS セミナー」では少人数ゼミという性格上、最小 5 名から最大 15 名までの定員を設けている。2019 年度から第 5 希望まで（それまでは第 3 希望まで）の予備登録を可能にして、抽選により履修許可を出している。その結果として、2018 年以来「履修した」の比率が全体で 65%→70%→65%→62%→66%→66%と推移してきている。また、近年の状況と同様に全体の 17%が予備登録そのものをしていない。文系と理系を比較すると、今年は理系の履修率が文系より 10%近く低くなり、過去 5 年間では、文系：74%→72%→64%→74%→70%、理系：69%→62%→62%→62%→63%と推移してきている。その理由については Q.20 と Q.21 で問うことにする。

Q.19　Q.18 で「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。
①とても満足している　②どちらかというと満足している　③どちらかというと満足していない
④満足していない

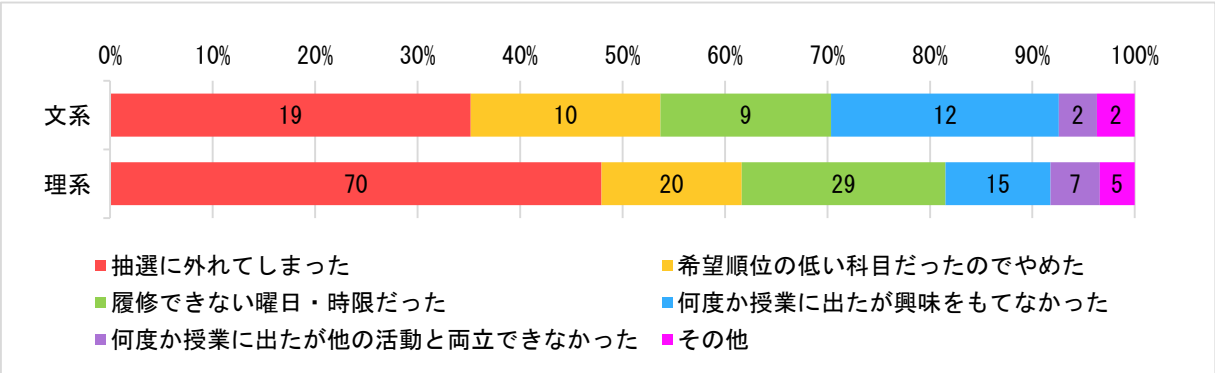
＜図 15　ILAS セミナー履修者の満足度＞



Q.19 では、ILAS セミナーを履修した学生の満足度を尋ねた。図 15 に示したように、「とても満足」と「どちらかというと満足」を合わせると 95％の学生が学習内容に満足しており、（少なくとも現在のアンケート形式となった 2017 年より）ずっと高い水準で推移している。

Q.20　Q.18 で「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。
①抽選に外れてしまった　②希望順位の低い科目だったのでやめた　③履修できない曜日・時限だった
④何度か授業に出たが興味をもてなかった　⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
⑥その他（記述回答）

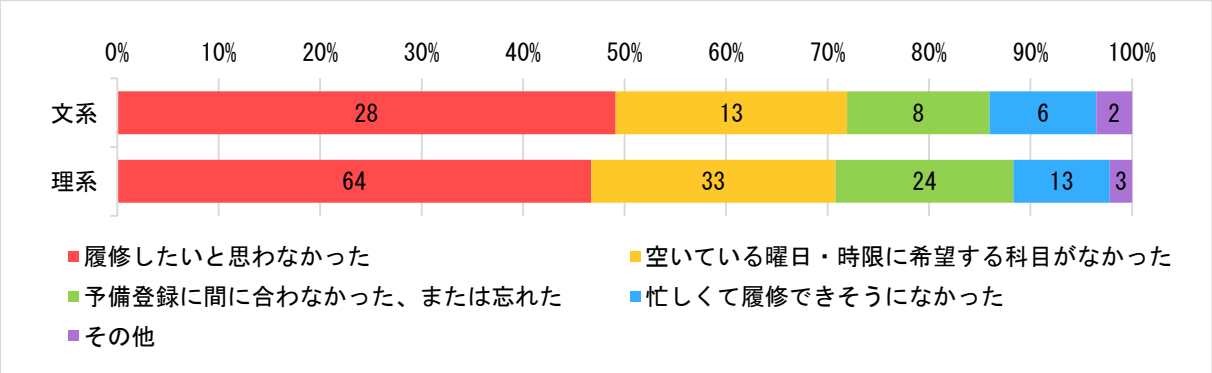
＜図 16　ILAS セミナー：予備登録したが履修しなかった理由＞



この設問で「予備登録をしたが履修しなかった」理由を尋ねた。回答数が限られるため、年々の変動が大きい結果となっているが、今年も「抽選に外れてしまった」が理由としてもっとも多く、理系の約半数、文系の 1/3 に及ぶ。

Q.21　Q.18 で「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかった理由は何ですか。
①履修したいと思わなかった　②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
③予備登録に間に合わなかった、または忘れた　④忙しくて履修できそうになかった
⑤その他（記述回答）

＜図 17　ILAS セミナー：予備登録をしなかった理由＞



＊Q20,Q21 の「留学生/その他」の回答は回答数が少ないため、文系・理系に含めている

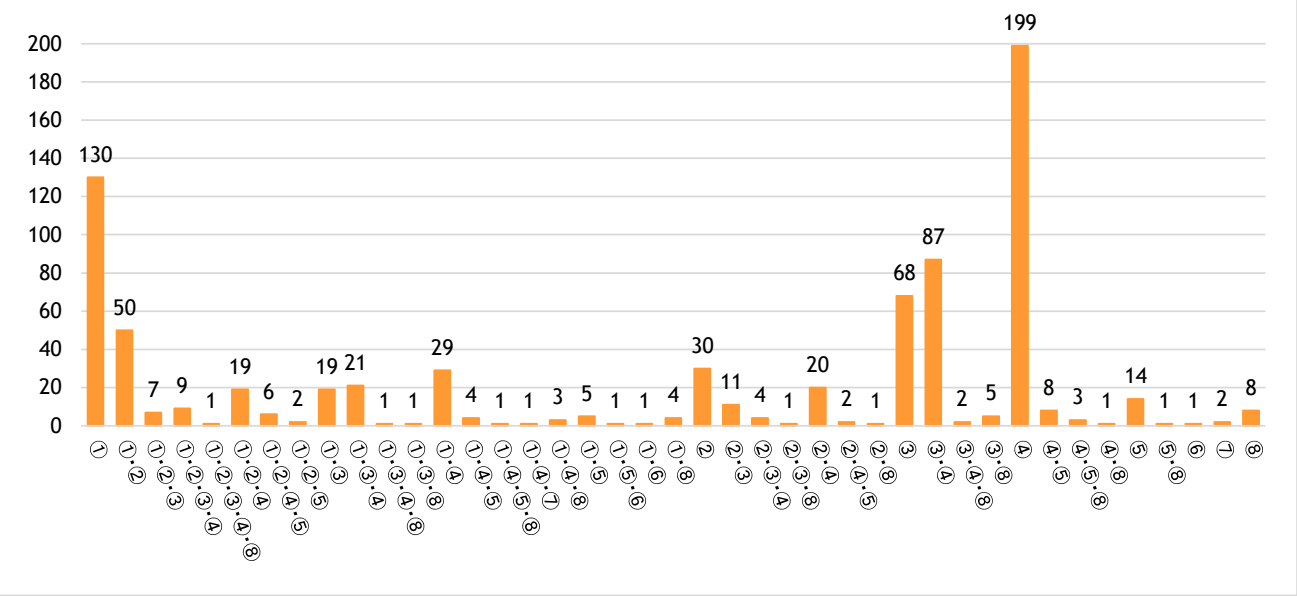
「予備登録をしなかった」学生に理由を尋ねた。やはり回答数が限られているが、毎年ある程度似た結果となっている。結果は、「履修したいと思わなかった」が約半数あり、「空いている曜日・時限に希望する科目がなかった」の回答を加えると 70％以上になる。Q.18 で予備登録をしなかった学生の比率が全体の 17％であったことを考慮すると、回答者の約 9％はもともと「履修したいと思わなかった」と回答しており、ILAS セミナーそのものに興味をもっていないことになる。

また最近、担当教員の退職等もあり ILAS セミナーの開講科目数が少なくとも過去 7 年間は減少傾向（前期開講 277→267→265→237→238→245→235 科目）にあることから、各部局への協力依頼を積極的に行って魅力的なテーマの ILAS セミナーを継続的に提供していただく方策を考えていく必要がある。2022 年度の第 26 回全学教育シンポジウムでは、「自律的課題発見・解決を通じて自立を促す少人数教養教育―もっと ILAS セミナーを」のテーマのもと、事例紹介や学生インタビューの検証なども含めて、現状認識を共有し近未来を展望する講演があった。そこでの具体的な議論を踏まえて、学生の学びの意欲をよりいっそう高め精神の自立を促す少人数教育の目玉として、これからの ILAS セミナーを企画・実施していくことの重要性を認識した。そして、「全学共通科目と ILAS セミナー」のリーフレットを作成し、2023 年度新入生全員に配布して、新入生の「京都大学での学び」の始まりを支援する活動を開始した。

Q.22　スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習 I・ II ・ III、地球科学実験のうち、１回生で履修した科目の□欄チェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へ進んでください。

①スポーツ実習 IA　　②スポーツ実習 IB　　③物理学実験　　④基礎化学実験
⑤生物学実習 I　　⑥生物学実習 II　　⑦生物学実習 III　　⑧地球科学実験

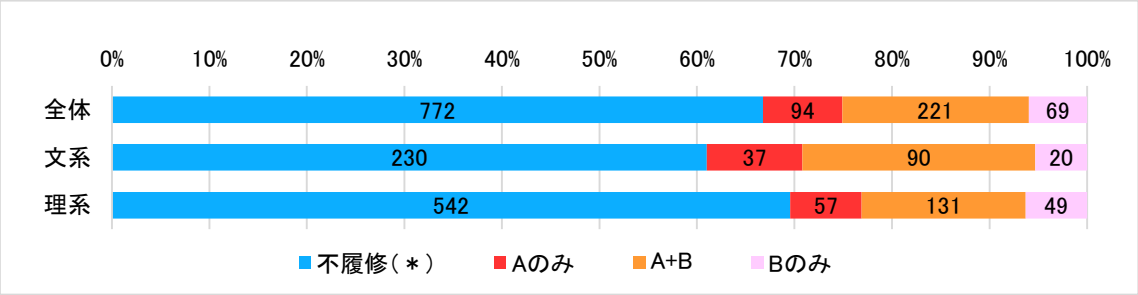
＜図 18　回答数と履修した科目の組み合わせ＞



＊参考：いずれもチェックなし　373 名

Q.22 では、いわゆる１単位科目の履修状況を尋ねた。スポーツ実習と理系の実験科目が該当する。それぞれの科目の意義は明確に設定されているが、その意義とは無関係に、学習時間やコマ数の割に単位が少ないという理由で、履修を敬遠するという傾向にある。その実態を調べることが本設問の目的である。

＜図 19　スポーツ実習履修状況＞



（＊1）「A のみ」には「スポーツ実習 IA」に加え実験・実習科目をチェックしている学生も含む。「B のみ」「A+B」も同様。

（＊2）「不履修」は本設問にてスポーツ実習にチェックを入れていない、もしくは本設問の科目はいずれも履修していない場合とする。

図 19 で全体平均を見ると、70%ちかくの学生がスポーツ実習を履修していない。少なくとも 2018 年から 2020 年までは 60%前後で変動していた（61%→69%→59%）が、2021 年はコロナ禍の影響で 80%を超える不履修となり、昨年今年は以前に近い状況に徐々に戻りつつあると思われる。スポーツ実習の不履修は理系のほうが 1 割近く多く、各学部のカリキュラムによる差にも依ると考えられる。

次に、理系の実験科目について結果を述べる。まず参考資料は、2017 年度～2023 年度（前期）の実験科目履修者数であり、実験科目全体の実施規模を概観できる。

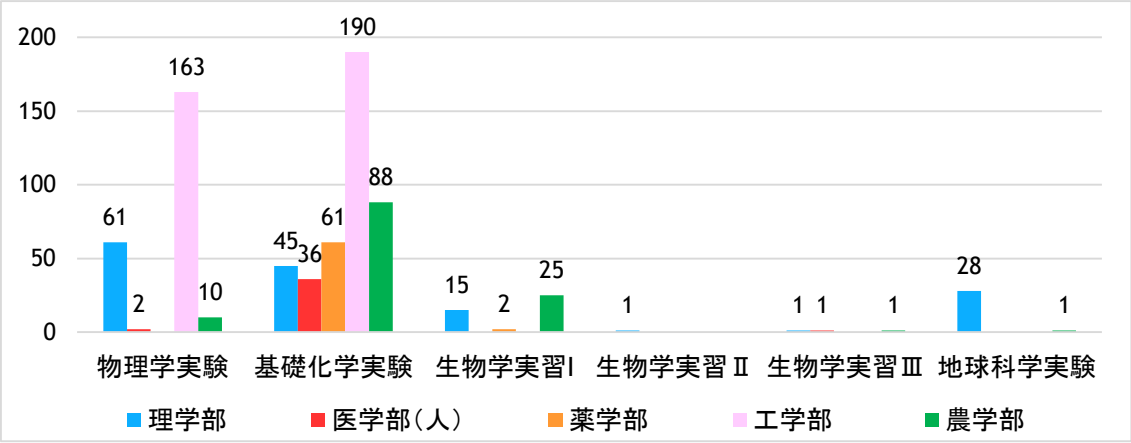
◆参考資料（履修取消前の数値、カッコ内は取消者数、院生・非正規生を除く）

科目名	2023(前期)	2022(全体)	2021(全体)	2020(全体)	2019(全体)	2018(全体)	2017(全体)
物理学実験	327(35)	608(48)	654(27)	766(41)	603(80)	510(47)	598(74)
Elementary Experimental Physics-E2	-	5(2)	7(3)	14(2)	11(2)	7(1)	7
基礎化学実験	508(23)	947(30)	932(11)	1021(21)	881(28)	724(10)	738(15)
Fundamental Chemical Experiments-E2	69(1)	112(1)	77	76(1)	96(1)	48	48
生物学実習I	54(1)	138(3)	131(3)	86(6)	114(2)	139(3)	111(4)
生物学実習Ⅱ	10	22(1)	23	19(1)	30	32	19
生物学実習Ⅲ	19	26	38(1)	28(2)	26(3)	50	45
地球科学実験	50(1)	83(3)	87(2)	99(10)	85(4)	53	69(4)

今年は前期のみのデータであり、各科目の変動について認識・議論することができない。2021 年度にはコロナ禍の影響があったかもしれないが、年々変動の範囲内である。これまでにも、選択必修科目の変更の影響等があったかもしれないが、実験科目履修者数の経年変化傾向を議論するには引き続きデータ収集を継続する必要がある。コストパーフォーマンスが悪いという学生意識が履修者減少を招かないようにするためには、各学部・学科のガイダンス等で実験科目の重要性を強調し、分野の特性に応じた履修指導を継続的に行う必要があるだろう。

図 20 は、実験科目を 2022 年度に履修した理系学生の回答数を学部別、実験別に示したものである。一目して分かるように、物理学実験は理と工の学生が履修し、基礎化学実験は全ての理系学部の学生、生物学実習は理と農の学生、地球科学実験は理の学生が履修するという結果である。

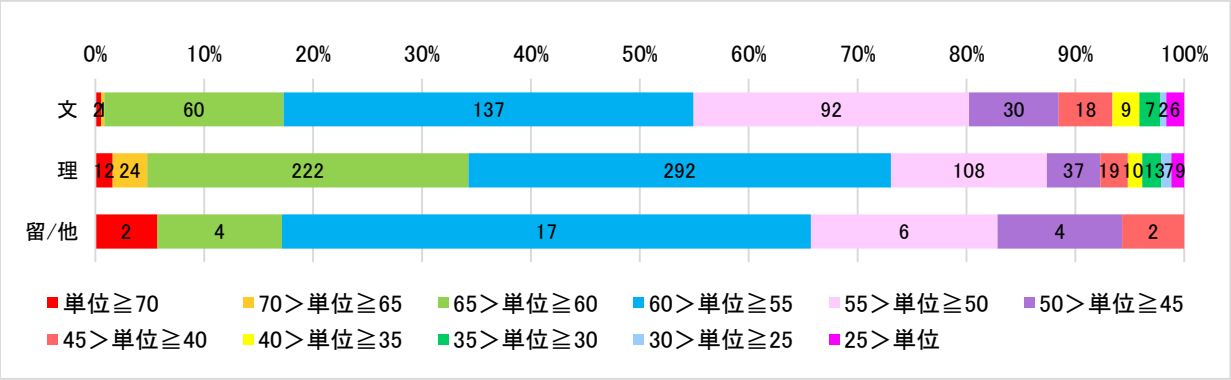
＜図 20　理系学部別実験履修者数＞



7．履修動向と成績

Q.23　あなたは 1 回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1 回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。
①単位≧70　②70>単位≧65　③65>単位≧60　④60>単位≧55　⑤55>単位≧50　⑥50>単位≧45
⑦45>単位≧40　⑧40>単位≧35　⑨35>単位≧30　⑩30＞単位≧25　⑪25＞単位

＜図 21　取得単位＞



単位の実質化の議論において、授業時間ならびに予習・復習・課題等に要する授業外学習時間を十分に確保することが重要である。大学設置基準では 2 単位授業 1 コマにつき 4 時間の授業外学習時間が求められており、そのためには 1 日に学習する授業コマ数は適切に抑制される必要がある。本学では全学共通科目に CAP 制を導入して、2019 年度入学生までは原則として上限を 30 単位と定めていた。しかしながら、全学共通科目に加えて学部により専門基礎科目の履修が課せられていること、集中講義等の制限除外科目があること等から、1 回生で 70 単位以上も取得する学生が散見される事態となっていた。この状況を改善するため 2020 年度からは全履修科目の上限を原則 30 単位に制限する CAP 制度が採用されている。この設問ではこの制度の導入による変化を調査した。

図 21 の全体像では、一昨年までの傾向と変化が起きている。文系学部では 60 単位以上を取得した学生の比率が 43%→21%→17%、理系学部では 50%→40%→34%（65 単位以上取得の学生比率では、過去 4 年で、文系 18%→5%→1%→1%、理系 31%→10%→7%→5%）と減少している。CAP 制度の定着により 1 回生で過剰な単位を取得する状況が徐々に改善されてきていると考えられる。

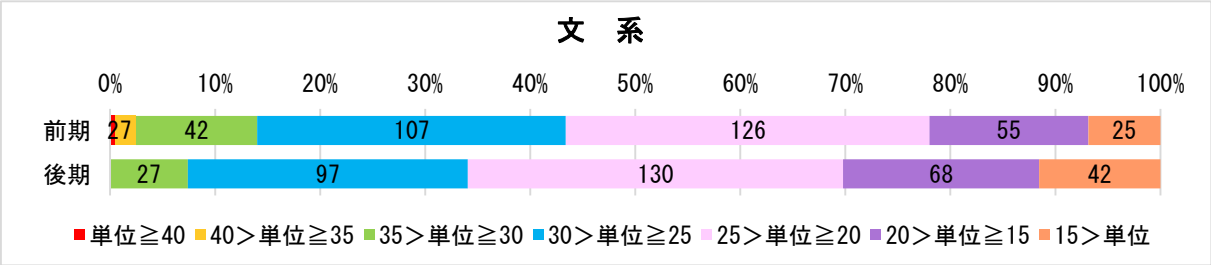
しかし、本学の多くの学部で卒業要件となっている 138~156 単位（大学設置基準では 124 単位）と比較すると、要卒単位の半分ちかくの 60 単位以上を 17~34%の学生が 1 年間で取得するという事態であり、本学の 1 回生は依然として単位取り過ぎの状態にある。これは単位の実質化の要請からも、また標準修業年数 4 年という教育体系から見ても好ましくない状態であり、さらに改善するための対策を取る必要がある。現行 CAP 制度でも 1 回生前期に修得できる単位数を医学部で 36 単位、理学部で 34 単位と特例が設けられている。また理学部では成績優秀者には CAP 以上の単位修得を認めている。さらに集中講義は CAP 対象外としているため制度が十分に機能しない部分もある。

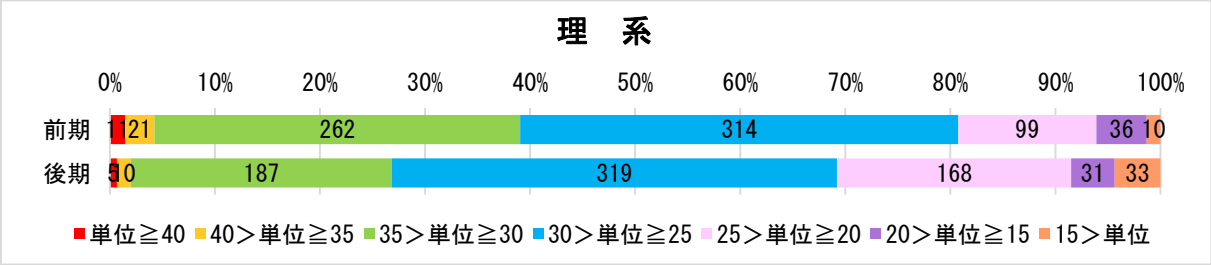
これまでの記述の繰り返しになるが、各学部で学生の履修行動を把握し、１回生、特に前期に配当する教養・共通科目や専門基礎科目の種類や単位数等、2020 年度の全履修科目 CAP 制度の導入に伴う動向を把握して、１・２回生のカリキュラム全般について検討を続けられるよう希望する。

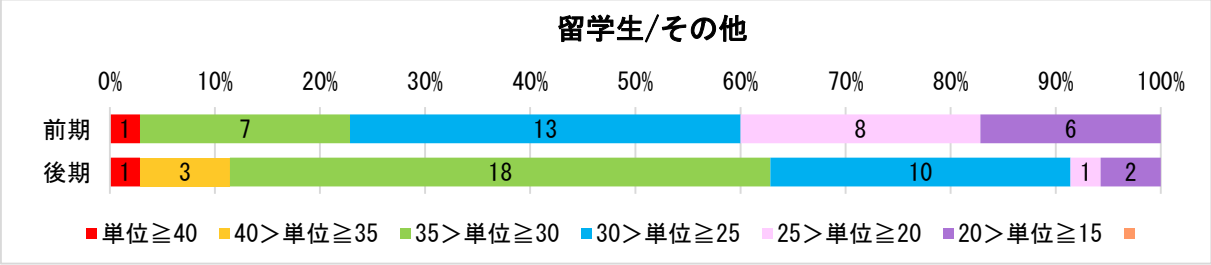
Q.24　Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「前期」の取得単位数はどれくらいですか。
①単位≧40　②40>単位≧35　③35>単位≧30　④30＞単位≧25　⑤25＞単位≧20　⑥20＞単位≧15　⑦15＞単位

Q.25　Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「後期」の取得単位数はどれくらいですか。
①単位≧40　②40>単位≧35　③35>単位≧30　④30＞単位≧25　⑤25＞単位≧20　⑥20＞単位≧15　⑦15＞単位

＜図 22　全学共通科目の取得単位＞







Q.23 に続いて、取得単位の内の全学共通科目の単位数を前期、後期に分けて調査した。図 22 において文系、理系で比較すると前期後期ともに理系の方が取得単位数の多い学生比率が高い。前期では、「35＞単位≧30」の区分つまり 2020 年度以降の CAP ぎりぎりまで取得している学生比率が、文系で 12%、理系で 35%である。何れの系でも前期と比べて後期の履修は少なくなる傾向であるが、理系は後期でも「35＞単位≧30」以上の区分が 27%程度ある。

◇全学共通科目取得単位数の前期と後期の相関

図 23 のグラフの両軸の数値は以下のとおりとする。

「単位≧40」を 7、「40＞単位≧35」を 6、「35＞単位≧30」を 5、「30＞単位≧25」を 4、「25＞単位≧20」を 3、「20＞単位≧15」を 2、「15＞単位」を 1

＜図 23　2022 年度の全学共通科目の取得単位・前後期の相関＞

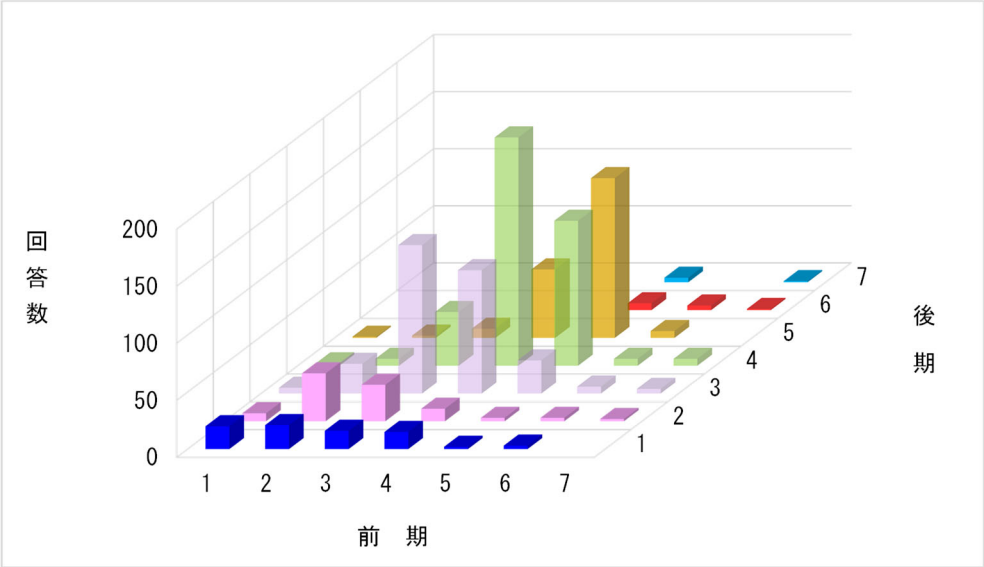


図 23 では、前期・後期の単位取得数の相関を見ている。上述のように「35＞単位≧30」の区分 5 は、CAP 上限を越える区分であるが、それより多い区分 6、7 にもゼロでない数の学生がいる。これは学部による条件の違いや、時間割に現れない集中講義の履修単位の取得によると思われる。2019 年度までは「前期 5、後期 5」にあったピークが「前期 4、後期 4」に移り、多くの学生が前期・後期を通して取得単位を抑制していることを示している。分布の尾根に着目すると、以前はそのまま手前側（後期で 3、2 と少ない単位数区分）に尾を引く分布になっていたが、2020 年度からは「前期 3、後期 3」「前期 2、後期 2」へと尾根がずれる分布へと変化した。前期に抑制気味に単位を取得した学生は、後期も抑制気味に履修する傾向があると見ることができ、CAP 制の影響が出てきていると考えられる。しかし、先に述べたように、早期過剰取得の傾向も引き続き残っており、各学部の 1 回生カリキュラム、履修指導、さらに 2020 年度の CAP 数変更に伴う動向を注視しながら、制度の適正化を進めていく必要があると思われる。

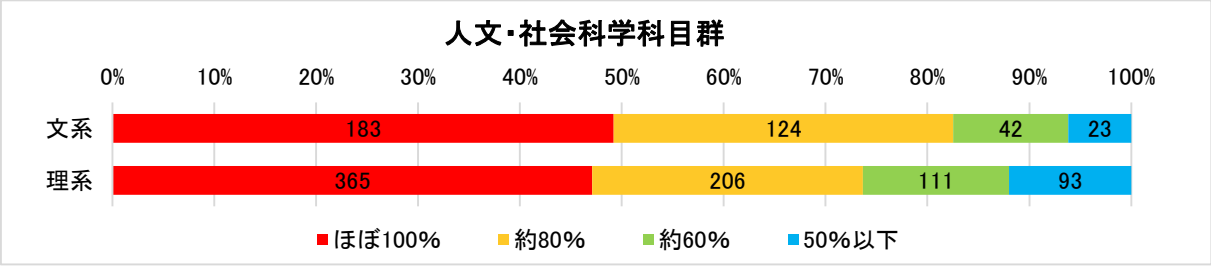
Q.26　1 回生の間に単位を取得した「人文・社会科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.27　1 回生の間に単位を取得した「自然科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.28　1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の英語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.29　1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の初修外国語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

＜図 24　授業出席率＞



4 科目群（「人文・社会科学科目群」「自然科学科目群」「外国語科目群・英語」「外国語科目群・初修外国語」）の授業出席率を文系・理系別に記載した。実際に出席回数を計測したのではなく学生本人の意識による集計であることに留意されたい。図 24 は人文・社会科学科目群の出席率を示したものである。授業に付いていくためにはやはり「80%以上」の出席率が必要と考えるが、出席率は学部による差が大きく、文系理系の差にも残っている。平均的には全体の 77%の学生が「80%以上」の出席率と答えている。

＜図 25　授業出席率＞

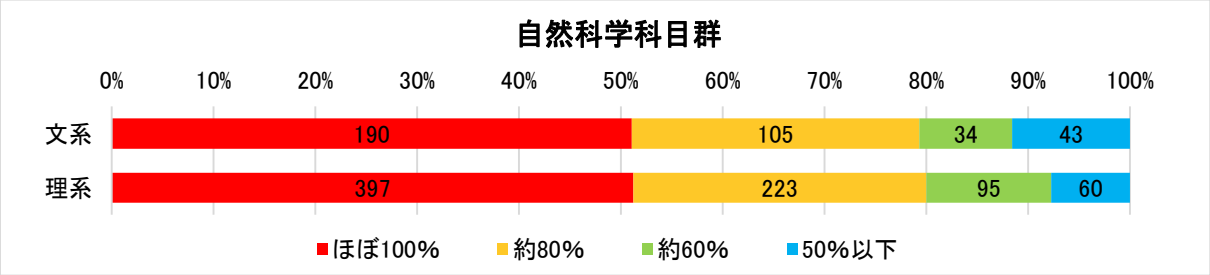
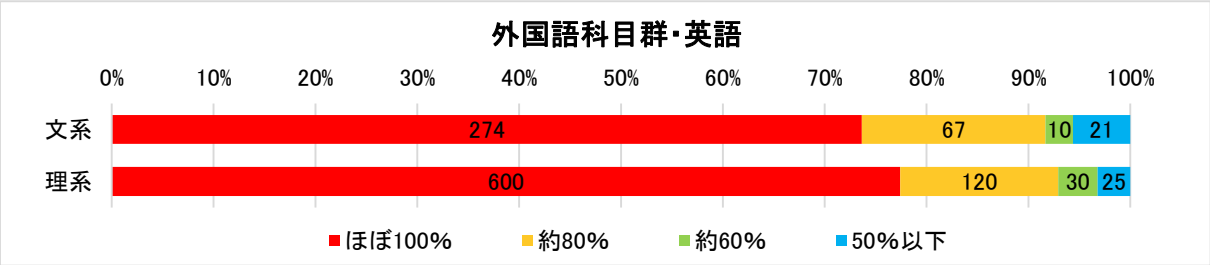
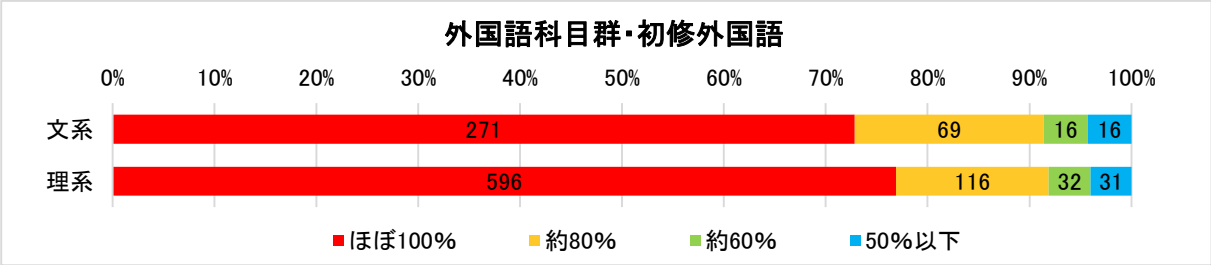


図 24 と同様に、「自然科学科目群」について尋ねたものが図 25 である。文系理系の差はあまりなく、全体の 80%の学生が「80%以上」の出席率と答えている。

＜図 26　授業出席率　上：英語、下：初修外国語＞





英語と初修外国語の出席率は高く、「ほぼ 100%」と回答した学生の割合が 75%前後で、「80%以上」では両系で 90%を超えている。

このように 4 科目群で比較してみると、語学科目の出席率は人文社会科目群や自然科学科目群の出席率よりも明確に高い。出席点検や授業内での積極的な参加が求められる語学と、講義形式が多い一般科目との授業形態の差を反映しているものと思われる。教養・共通教育の在り方の議論において参考になる結果である。

Q.30 あなたの1 回生（前期＋後期）終了時の GPA はどのレベルですか。1 回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください（非公開）。
①GPA ≧4.0 ②4.0＞GPA≧3.5 ③3.5＞GPA≧3.0 ④3.0＞GPA≧2.5 ⑤2.5＞GPA≧2.0
⑥2.0＞GPA≧1.5 ⑦1.5＞GPA

Q.31 あなたが1 回生後期（2018 年12 月）に受けたTOEFL ITP のスコアはどのレベルでしたか。
①スコア≧550 ②547≧スコア≧503 ③500≧スコア≧450 ④447≧スコア （非公開）

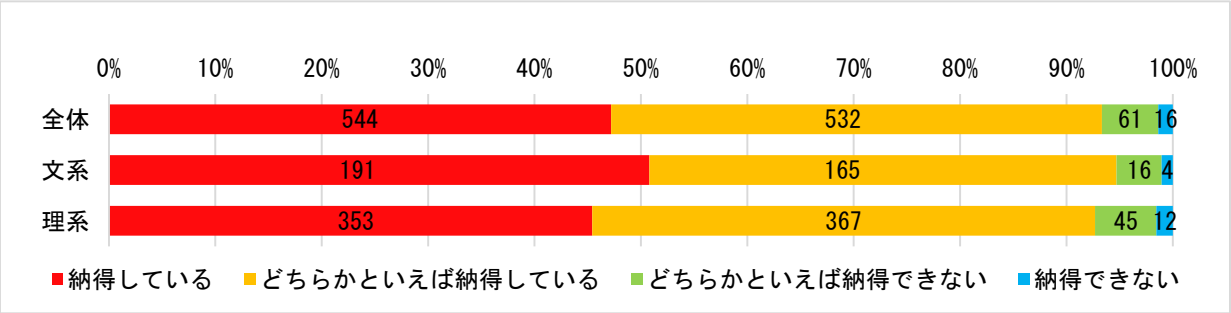
８．成績評価への納得度

Q.32　１回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします： 全体として自分の成績評価に納得していますか。

①納得している　②どちらかといえば納得している　③どちらかといえば納得できない

④納得できない

＜図 27　成績評価への納得度＞



成績評価の納得度については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。「納得している」、「どちらかといえば納得している」を合わせると、肯定的な回答をした学生は文系・理系を問わず 95％前後あり、全体として納得度は十分に高いと言える。

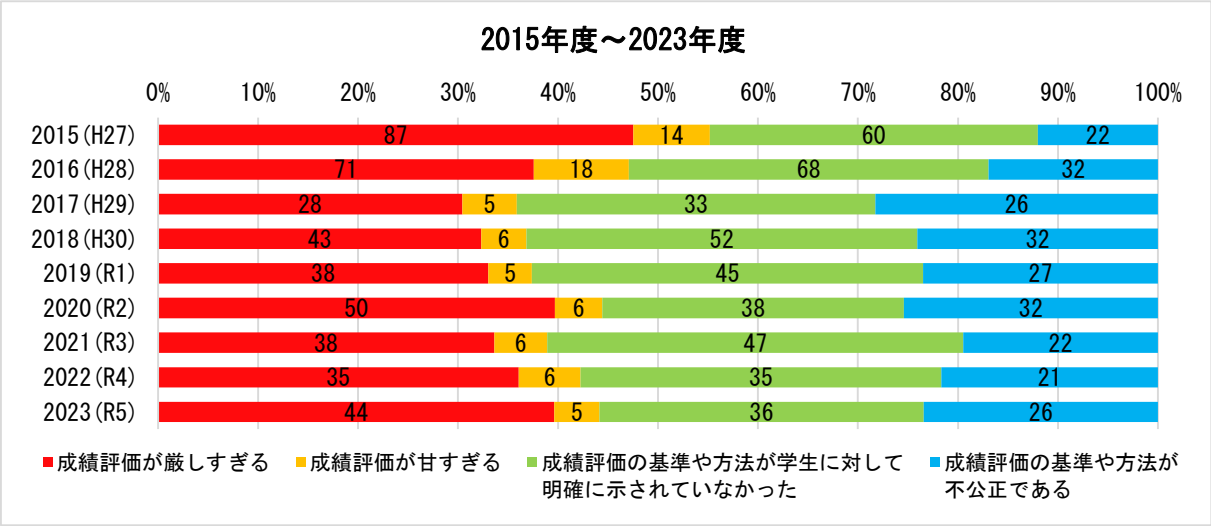
＜表 3　成績評価への納得度＞

	2005	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
納得している	39%	46%	41%	42%	40%	45%	49%	51%	47%
どちらかといえば納得している	46%	43%	48%	50%	52%	48%	44%	43%	46%
どちらかといえば納得できない	10%	8%	8%	6%	7%	5%	5%	5%	5%
納得できない	5%	3%	3%	2%	1%	2%	1%	1%	1%

この統計を取り始めた初期の頃（2005 年）と、最近の傾向を比較するために、回答における各項目の百分率を表 3 に示した。今回「納得している」がやや減ったものの 50%近くあり、「どちらかといえば納得している」を合わせた肯定的な回答は 2018 年度に 90％を超えて以来高い値を保っている。

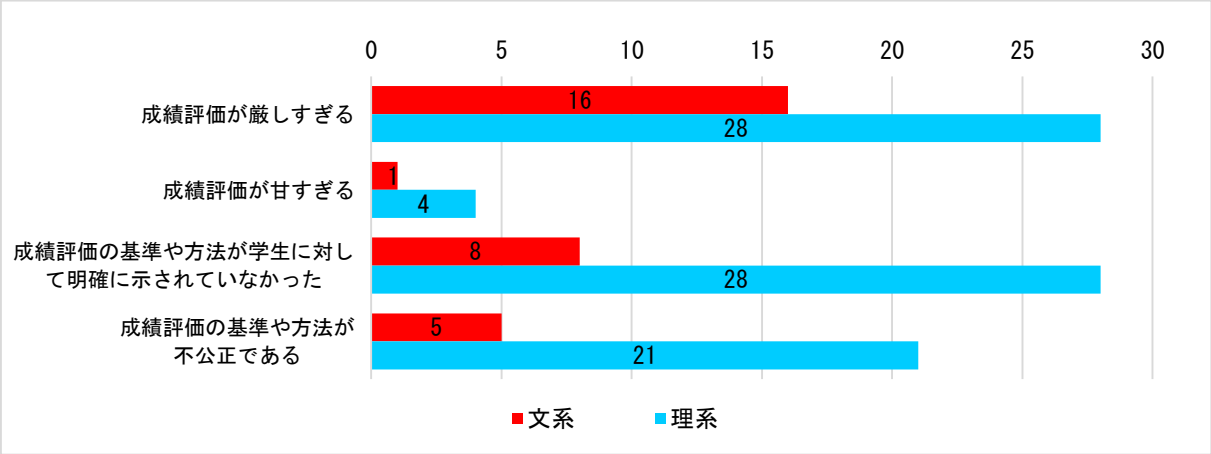
Q.33　Q.32 で「どちらかといえば納得できない」又は「納得できない」を選んだ方へ：　成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものの□欄にチェックをつけてください。①成績評価が厳しすぎる　②成績評価が甘すぎる　③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった　④成績評価の基準や方法が不公正である　⑤その他（記述回答）

＜図 28　成績評価に納得できなかった各理由の比率（複数回答）＞



Q.33 では成績評価に納得できない理由を尋ねた。この質問も毎年継続して質問している項目である。複数回答を可能にしているので、全回答における①～④の比率を図示している。2015 年度からのデータと合わせて変化を見ると、当初は①の「厳し過ぎる」の割合が次第に減る一方、④の「不公正」と感じる学生の割合が増加していたが、ここ 5、6 年ほどはおよそ一定に落ち着いたようにみえる。推測であるが、GPA の導入で成績に対する関心が高まり、相対評価としての明確さ、公平さを求める意見が強くなり、高止まりしているのではないだろうか。ただし、回答全体の 90％以上の学生は「納得している」と答えており、この項については回答者のうち約 10％の意見であることに留意する必要がある。

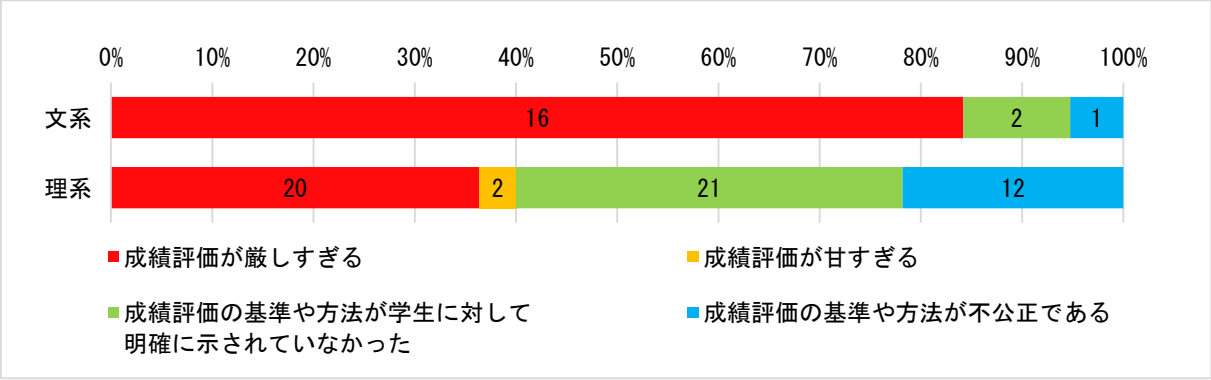
＜図 29　成績評価に納得できなかった各理由の回答度数（複数回答）＞



この図では文系と理系で回答度数を単純に表示している。文系理系ともに、①「成績評価が厳しすぎる」と③「基準や方法が不明確」が多く、④「基準や方法が不公正」が続いている。理系の学生の方が相対評価に対する関心がより強く表れているとも見えるが、コース分けや配属などで成績評価が用いられることが多いため、より合理的な成績評価を求めるものと推測される。

Q.34　Q.33 で選んだもののうち、最も重要なもの 1 つを選択してください。
①成績評価が厳しすぎる　②成績評価が甘すぎる　③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった　④成績評価の基準や方法が不公正である　⑤その他

＜図 30　成績評価に納得できなかった理由（最も重要なもの 1 つ）＞



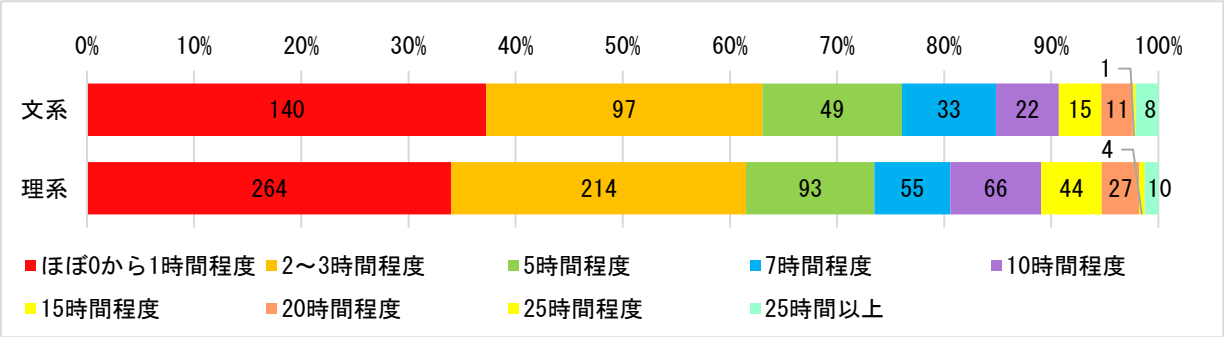
納得できない理由の最重要項目として選ばれた項目がこの図である。回答数が少ないため変動が大きく、信頼性に欠けるが、単一回答においても先の複数回答と同様に、文系では①「成績評価が厳しすぎる」が最も多く、理系では①「成績評価が厳しすぎる」と③「基準や方法が不明確」がともに多いという状況である。

9．学生生活

Q.35　平均して 1 週間に何時間程度、運動（スポーツ、散歩、ジョギング、サイクリング等）をしていますか。

①ほぼ 0 から 1 時間程度　②2～3 時間程度　③5 時間程度　④7 時間程度　⑤10 時間程度
⑥15 時間程度　⑦20 時間程度　⑧25 時間程度　⑨25 時間以上

＜図 31　1 週間に運動する時間＞

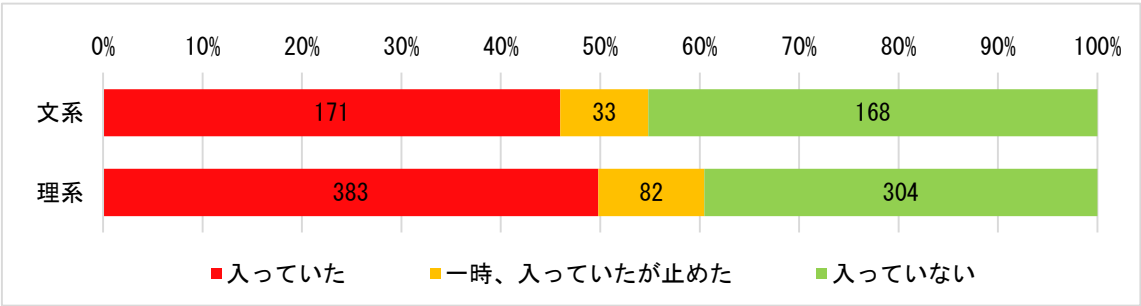


この質問では、1 週間に運動する時間を尋ねた。結果を図 31 に示したが、全体としておよそ昨年と同じ結果である。文系、理系を問わず 35%前後の学生は 0～1 時間/週程度とほとんど運動をしていない。Q.22 の回答から明らかなように、正課のスポーツ実習を履修していない学生が 65%以上いること、さらに彼らの 18～19 才という年齢を考えると、あまりに運動する時間が少ないことに驚く結果である。また、25％前後の学生は週 2～3 時間、つまり平均して一日に 20 分程度の運動をしている。週 7 時間以上の学生はおそらく体育系のサークルやクラブに入っている学生と思われるが、その比率はおよそ 25%程度である。

Q.36　あなたは、1 回生のときに運動系のクラブやサークルに入っていましたか。

①入っていた　②一時、入っていたが止めた　③入っていない

＜図 32　運動系のクラブ・サークル＞

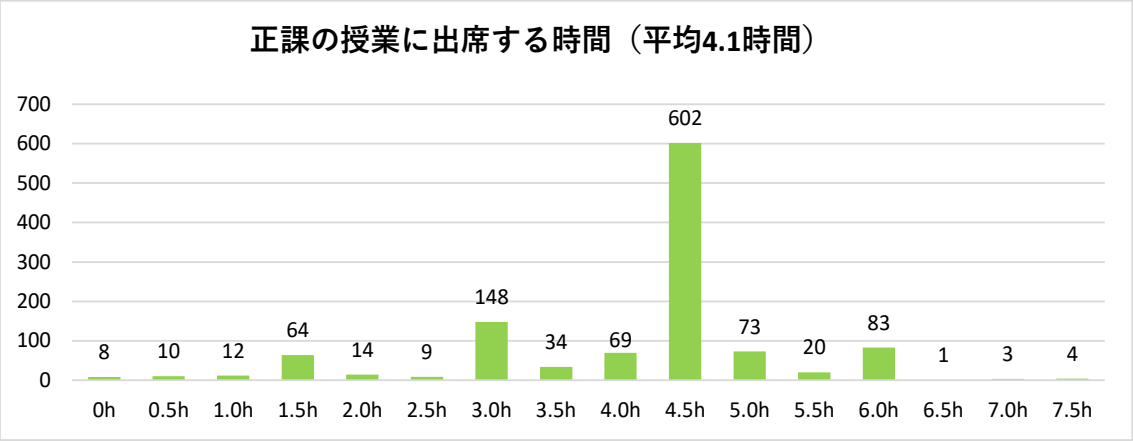


コロナ禍以前はサークルに入っていた学生が約半数いたが、一昨年は35%程度、昨年は40%台であり、徐々に以前の状態に戻りつつある。

Q.37～Q.43　授業期間中のあなたの平均的な一日（休祝日を除く月曜日～金曜日）における、Q.37~Q.42の活動時間を教えてください。なお、活動時間の項目は、＜正課の授業出席時間＞＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞＜通学時間＞＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞＜アルバイトの時間＞です。また、Q.43 の＜週末（土日）での予習・復習・レポート作成等の時間＞は土日合計の時間です。
ただし、ここでは便宜的に、非対面授業のオンライン・オンデマンド型は＜正課の授業出席時間＞に、課題研究型は＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞に加えてください。

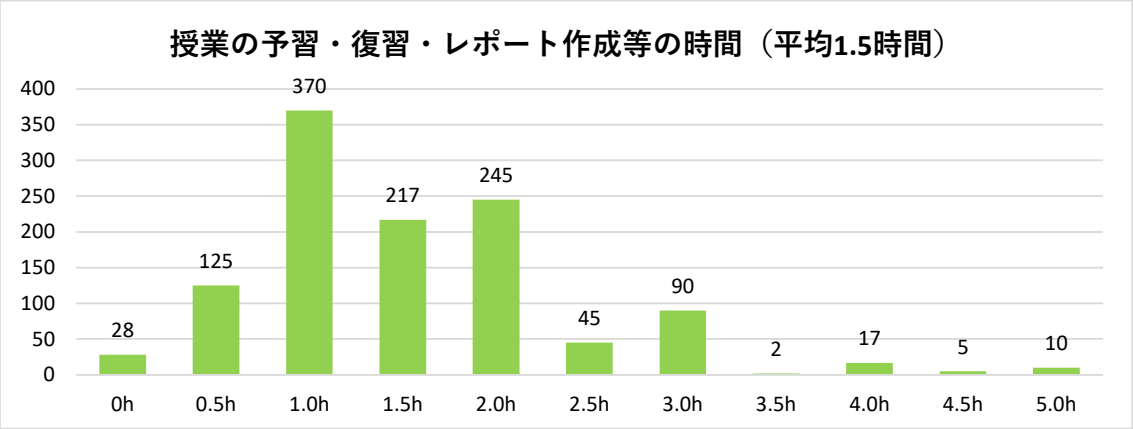
Q.37　＜正課の授業に出席する時間＞（1 コマの授業は 1.5 時間です）

＜図 33＞



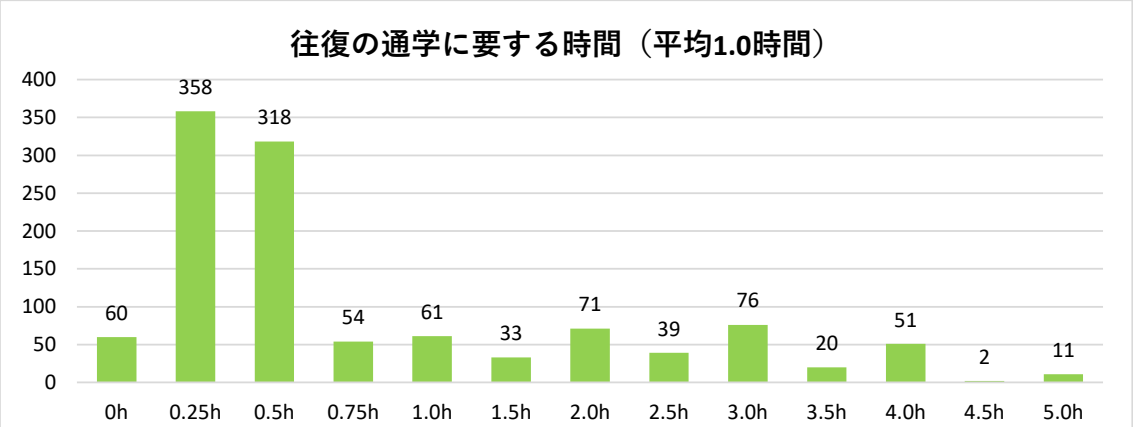
Q.38　＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞

＜図 34＞



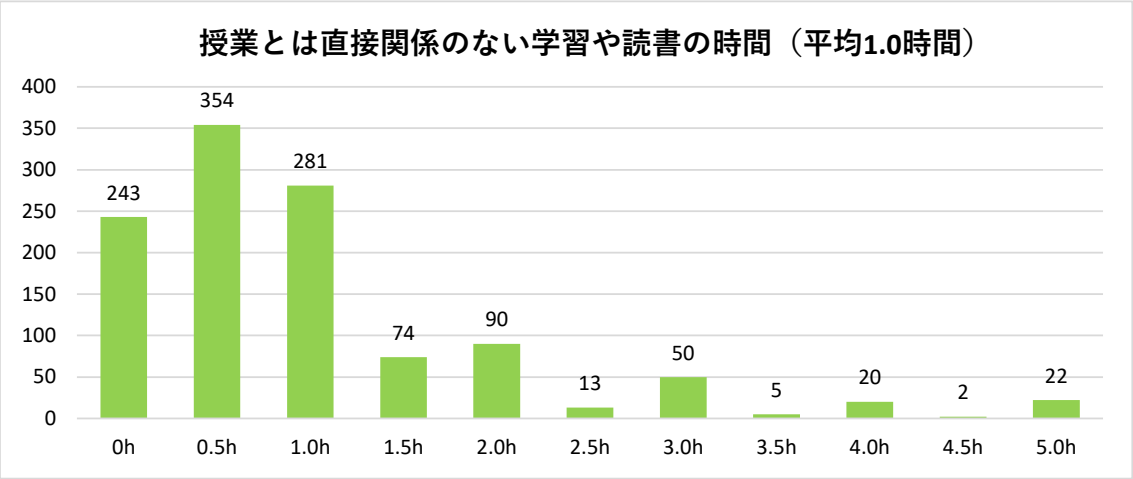
Q.39　＜往復の通学に要する時間＞

＜図 35＞



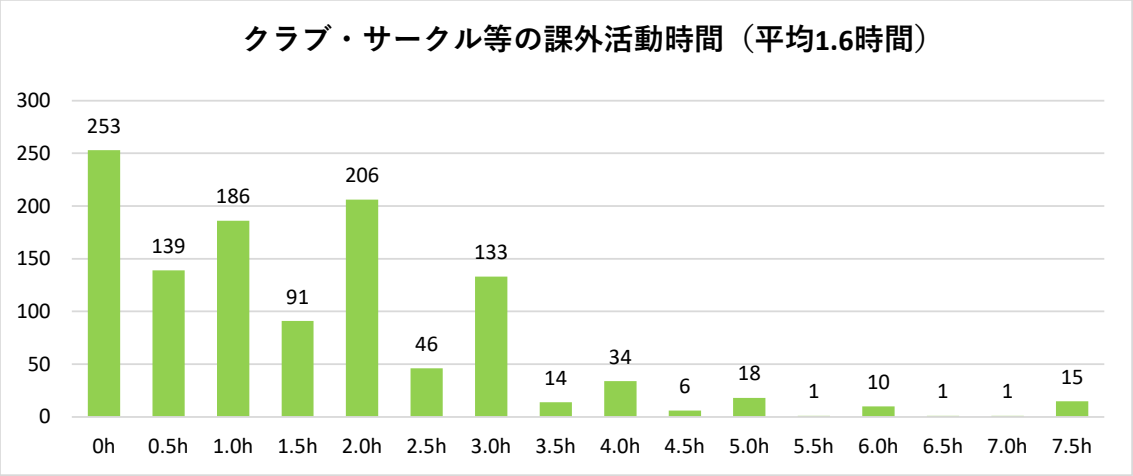
Q.40　＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞

＜図 36＞



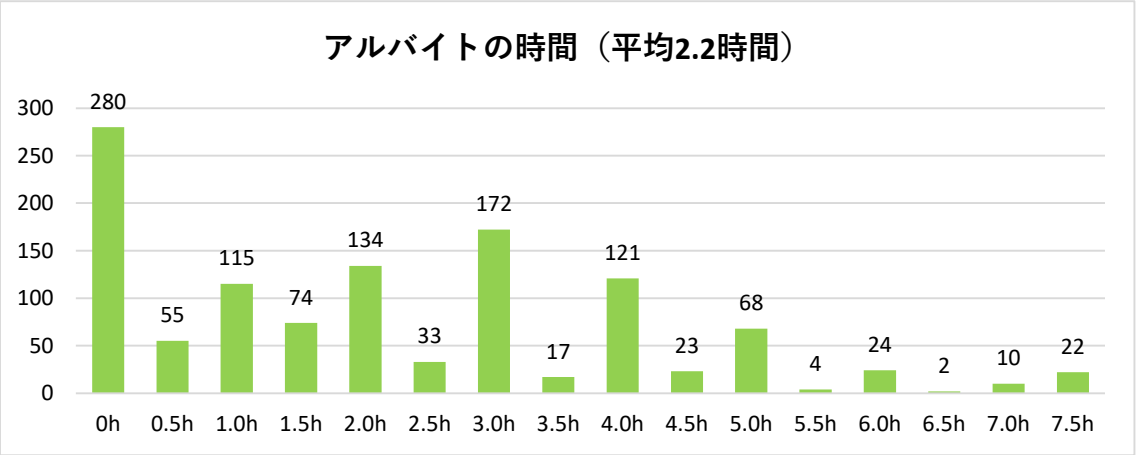
Q.41　＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞

＜図 37＞



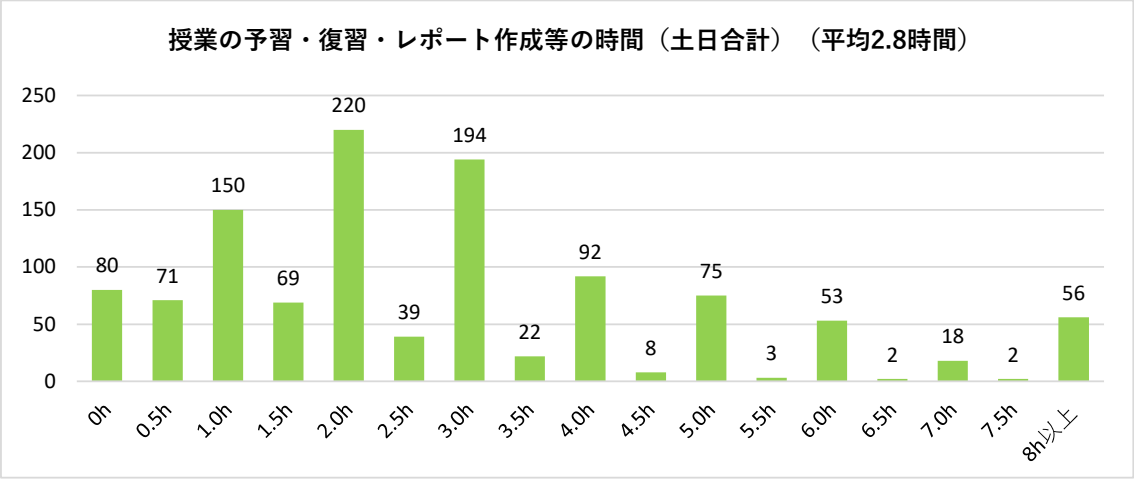
Q.42　＜アルバイトの時間＞

＜図 38＞



Q.43　授業期間中のあなたの平均的な週末（土曜・日曜）において、授業の予習・復習・レポート作成等に費やす時間があれば、土曜・日曜の合計時間を答えてください。

＜図 39＞



１回生がどのように生活時間を配分しているか、学生生活の実態と学習行動との関連を Q.37~Q.43 の 7 項目の質問により調べた。各項目について生活時間の人数分布を図 33～39 に示している。また、表 4 に全体、文系、理系での各項目平均値を示した。

以前の調査では、１週間当たりの活動時間を尋ね、時間数の記入を求めたところ、不合理な数字が多数入力されたため、2018 年より、質問は学期中の平均的な１日（休祝日を除く月曜日～金曜日）での時間配分を尋ねることに変更した。したがって、休日に多いであろう「アルバイト」、「授業とは直接関係のない学習や読書の時間」等については解釈に注意が必要である。また、Q.38 の「平日における時間外学習時間」では測定できない授業外学習時間が残るため、Q.43 では週末（土曜・日曜）に「授業の予習・復習・レポート作成等の時間」に費やす合計時間を尋ねている。以下の図表では、この項目（＊＊）については１日当たりの時間ではないことにご注意いただきたい。

＜表４　１回生の学生生活時間／日　(　)内は昨年の結果＞

R5	正課	予習･復習等	通学	＊	クラブ	バイト	週末学習時間＊＊
全　体	4.1(4.2)	1.5(1.8)	1.0(1.2)	1.0(1.0)	1.6(1.4)	2.2(2.0)	2.8(3.1)
文　系	4.0(4.0)	1.4(1.6)	1.0(1.1)	1.1(1.1)	1.6(1.5)	2.4(2.2)	2.4(2.6)
理　系	4.2(4.3)	1.6(1.9)	1.1(1.2)	1.0(0.9)	1.5(1.4)	2.1(1.9)	3.0(3.4)

＊授業とは直接関係のない学習や読書の時間

＊＊週末の予習・復習等（土日の合計であり１日当たりではない）

全体の平均値で見ると、昨年の結果から変化した項目とほとんど変化なしの項目に分かれる。前者は一昨年にコロナ禍の影響で大きく変化したのがもとに戻る傾向を示すもので、過去 4 年の変化で見ると予習・復習 1.6→2.2→1.8→1.5 時間、通学 1.1→0.9→1.2→1.0 時間、クラブ 1.8→1.0→1.4→1.6 時間、アルバイト 2.0→1.9→2.0→2.2 となっている（下線付きは一昨年度でコロナ禍の影響あり）。週末学習時間は 2.7→3.7→3.1→2.8 時間である。他方、正課、授業とは直接関係のない学習や読書は昨年の結果と同じ値となっている。

・正課授業出席時間の 1 日 4.5 時間は、 1 コマ授業を 1.5 時間として 1 日 3 コマに相当している。図 33 を見ても、4.5h の回答が突出して多く、3.0h が続いている。1 コマを 2 単位科目として換算すると 1 日 3 コマは週 15 コマ、年 60 単位となり、Q.23 で約 2/3 の学生が 55 単位以上取得していたことと整合的である。コロナ禍影響の年を経て、CAP 制変更後の定常的な状態に戻っていると思われる。

・単位の実質化の議論でも着目され、かつ成績に影響するであろう授業の予習・復習・レポート作成等の時間（授業時間外学習時間）の項目は、全体でこれまで 1.5→1.4→1.6→2.2→1.8→1.5 時間と推移し、また、週末の予習・復習等の学習時間（＊＊）も土日合計で、2.1→2.7→3.7→3.1→2.8 時間と推移してきており、ともにコロナ禍以前の状態に戻ったと考えられる。

　ところで、大学設置基準では授業時間外学習時間として 2 単位授業 1 コマ当たり 4 時間の時間外学習を規定している。前述の 1 日 2.7 コマ授業が現実とすると、1 日 10.8 時間（設置基準）が要求されることなり、現実の 1 日あたり（1.5＋2.8/5）=2.1 時間とはあまりにも大きな隔たりがある。設置基準が非現実的であるということはたやすいが、それにしても時間外学習時間が 1 コマ授業当たり 0.8 時間（2.1 時間/2.7 コマ）程度という現実の値は大学の授業のあり方を再検討する必要を示している。

・通学時間は、文系、理系の学生で差がほとんどなく、コロナ禍以前の状況に戻っている。図 35 の分布を見ると、多くの学生は 0.5h 以内であるが、往復 2.5 時間以上の長距離通学をしている学生が約 17％もいることは、さまざまな企画をする上で留意しておく必要がある。

その他の項目についてみると、

・授業とは直接関係のない学習や読書の時間（＊）では、若干ではあるが文系が理系より常に長い値で推移してきている。以前の調査で読書について尋ねたが、その結果から推測すると、理系学生には授

業の教科書、参考書以外の読書を全くしない学生が少なからずいるものと思われる。

・クラブ・サークルには多くの学生が参加しており、一日あたりの平均時間はコロナ禍の影響を受けた一昨年より 1.0→1.4→1.6h と増えてきている。図 37 の分布図を見ると、課外活動時間がゼロを含む 2 時間以下の学生が約 76%であるが、3 時間以上が 20%、1 日 4 時間以上もクラブ・サークルに費やす学生が 8%もいる。

・Q.42 のアルバイトの項目では、学生の回答は 2 分化しており、平均値にあまり意味はないと考えられる。図 38 の分布図から分かるように、アルバイトをしていない実質ゼロ時間の学生が多数いる一方、アルバイトをしている学生群は 1 日当たり 2~3 時間程度にピークをもつ分布になる。1 日 4 時間以上と回答した学生は 274 名、5 時間以上は 130 名であり、それぞれ全回答者数 1156 名の 24%、11%になる。この中には経済的に困窮してバイトに追われる学生も多くいると思われるが、このような学生生活では勉学との両立は難しいものと思われる。

次に、Q.09「後期開始時の学習意欲」と学生生活との関連性を調べた。

＜図 40　学習意欲（後期始め）と学生生活時間＞

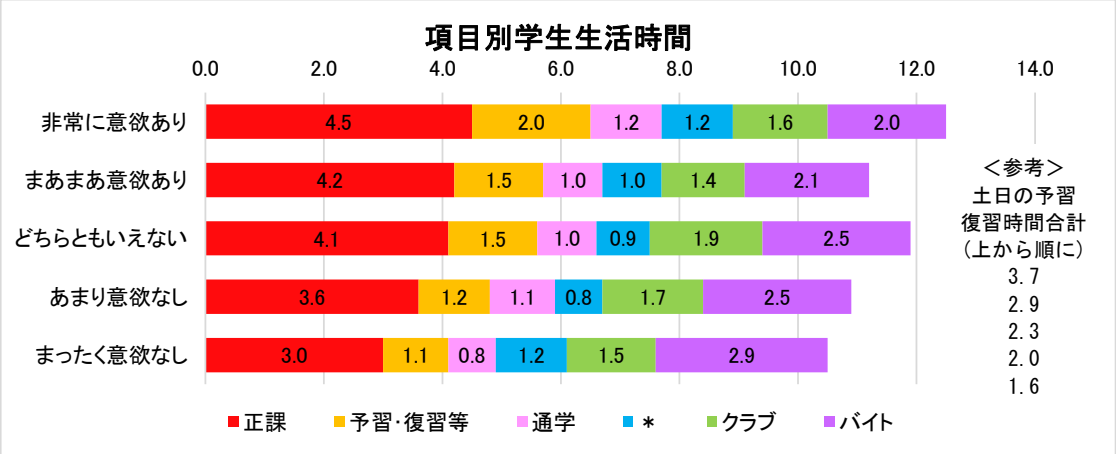


図 40 は後期開始時の学習意欲の区分ごとに学生生活時間のそれぞれを図示したものである。正課授業出席時間、授業時間外学習時間（予習・復習・課題等）に明確な傾向が表れている。すなわち、学習意欲の高い群ほど、これらの時間が長く、その和である全学習時間も伸びている。

図 40 には、4 年前から設問に加えた「週末（土日）の授業に関係する時間外学習時間」（＊＊）も欄外に参考として記載した。休日の合計時間であることには注意が必要であるが、学習意欲において、この週末学習を加えた授業時間外学習の合計時間と顕著な相関がみられる。様々な要素が複雑に作用しているが、上に指摘したように、正課授業出席時間よりは時間外学習時間が学習意欲、学習成績の向上と強く相関していることは明白である。

学生側の意欲に期待するのみならず、予習、復習を含めた学習意欲と行動を喚起する工夫を授業に組入れることが、同じ正課授業時間を使いつつ学習効果を上げる有効な方法と思われ、今後の教育改善の方向性を示唆している。

正課授業出席時間と時間外学習時間を合せた適切な学習時間については議論が必要である。学習時間が長ければ良いというものではない。多数派の中位群で、1 回生がおおよそ一日あたり授業 4.1 時間＋予習復習 1.5 時間で合計 5.6 時間学習の大学生活を送り、かつ年 55 単位以上も取得することについて、やはり疑問を感じる。質問・回答様式を一定にして、生活時間に関するこれらの項目の推移を長期的に観察する必要がある。

図 40 で下位群になるほど棒グラフの長さが短くなることも気がかりである。以前のこの調査で、1 日の睡眠時間はどの群でも 7 時間程度と一定であったことから、調査項目になっていない余暇時間が長くなることを意味している。もちろん余暇時間は健康的な学生生活を送るために必要な時間であるが、意欲低下群ほど実態不明な余暇時間が増えていることは気がかりな点である。

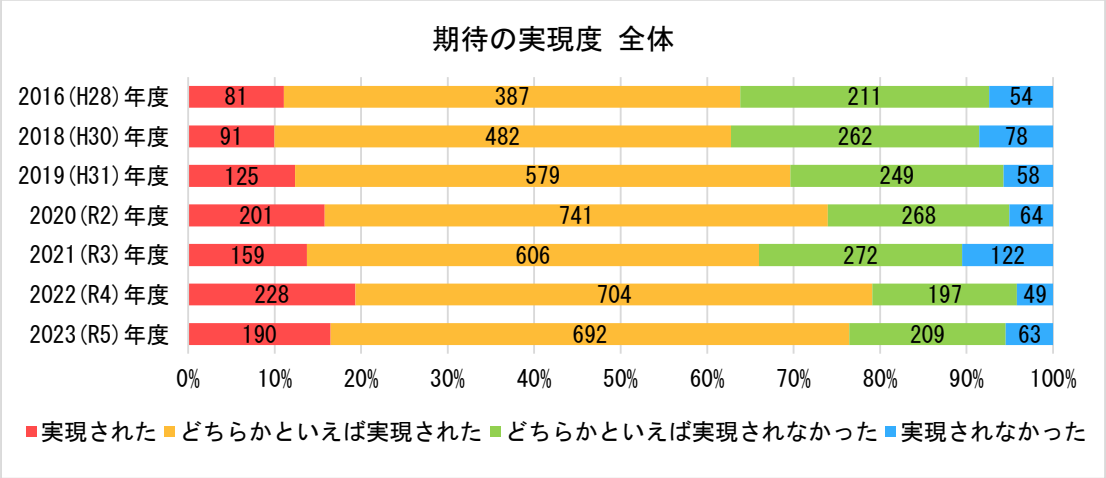
１０．期待の実現度

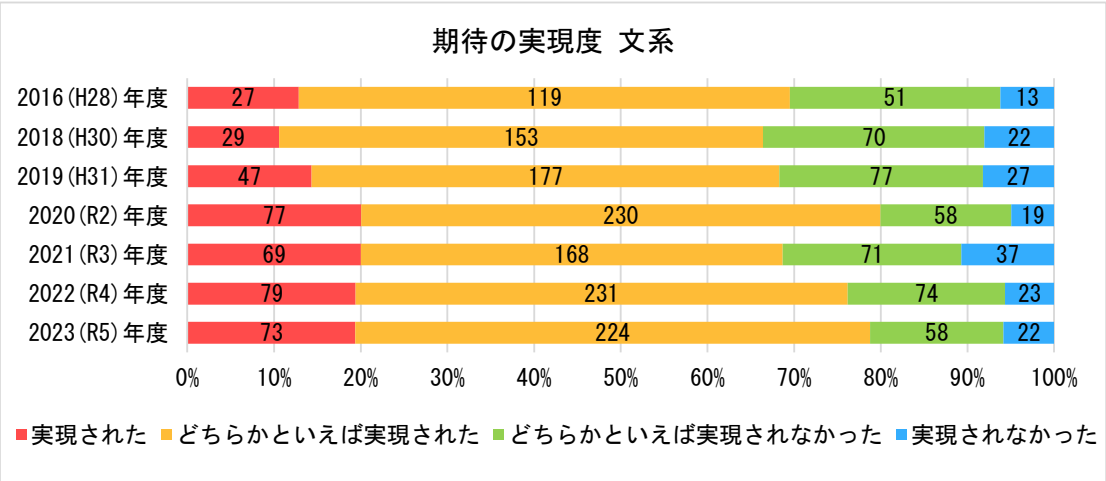
Q.44　全体として、あなたが全学共通科目に対して抱いていた期待は実現されましたか。

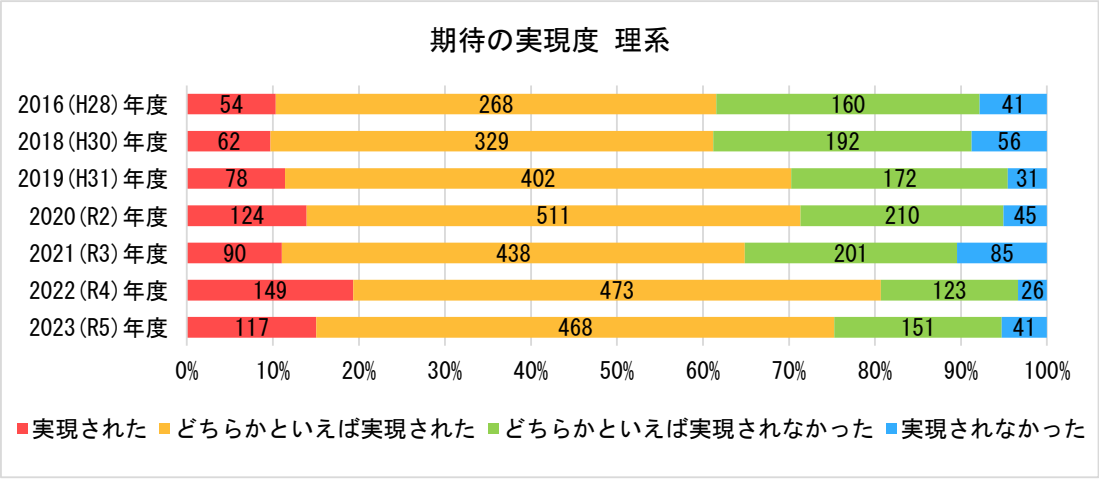
①実現された　　②どちらかといえば実現された。

③どちらかといえば実現されなかった。　　④実現されなかった。

＜図 41　期待の実現度＞







次に、全体的な印象として全学共通科目に対する期待の実現度を尋ねた。2016 年以降（2017 年度を除き)、同じ質問をしているので、図 41 ではその回答の経年変化を見ることができる。全体で今年度（2023 年度）の結果を見ると、「実現された」＋「どちらかといえば実現された」という肯定的な意見が 76%になり、昨年に次ぐ高い値になっている。また、文系、理系の内訳をみると、回答数の多い理系のほうが全体の変動に近いものとなっている一方、文系は近年安定して高い値が続いている。

「期待の実現度」は、向上感、達成感、ひいては教養・共通教育の成果に結びつく重要な要素であることから、今後とも注視するべき調査項目である。

１１．教養・共通教育についての意見

Q.45　今後の全学共通科目に対して、どのような改善を要望しますか。次の中からあてはまる全てのものの□欄にチェックをつけてください。

①特に要望はない　②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい

③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい　④授業の進め方をもっと工夫してほしい

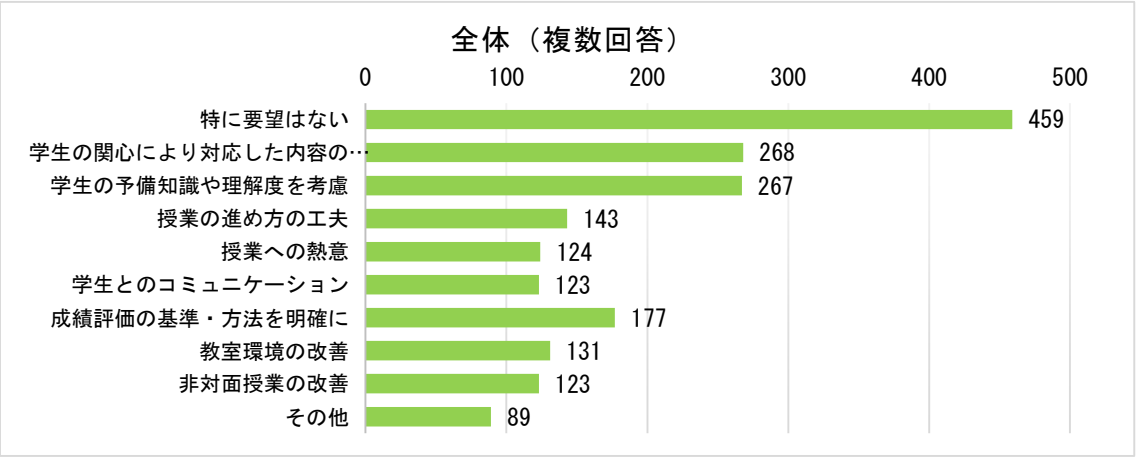
⑤授業にもっと熱意をもってほしい　⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい

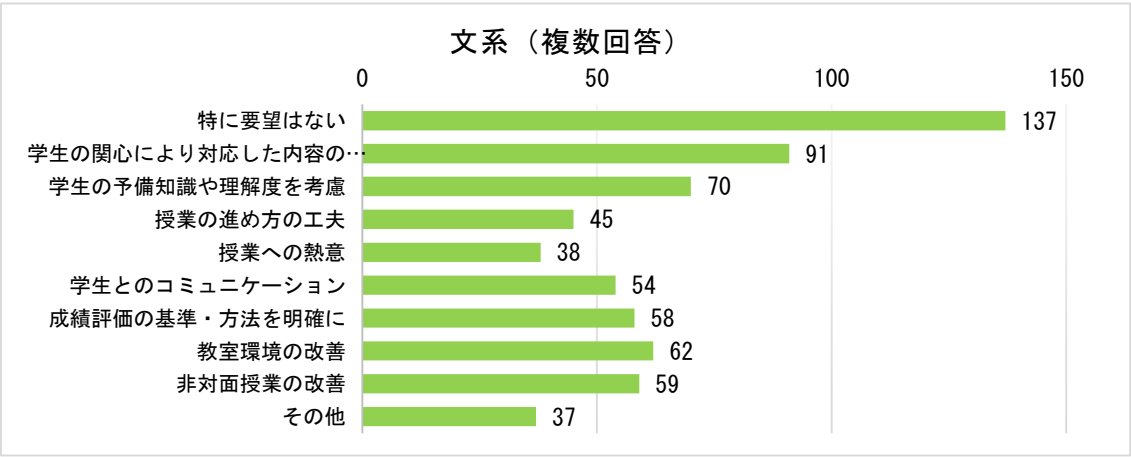
⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい　⑧教室環境(設備・広さなど）を改善してほしい

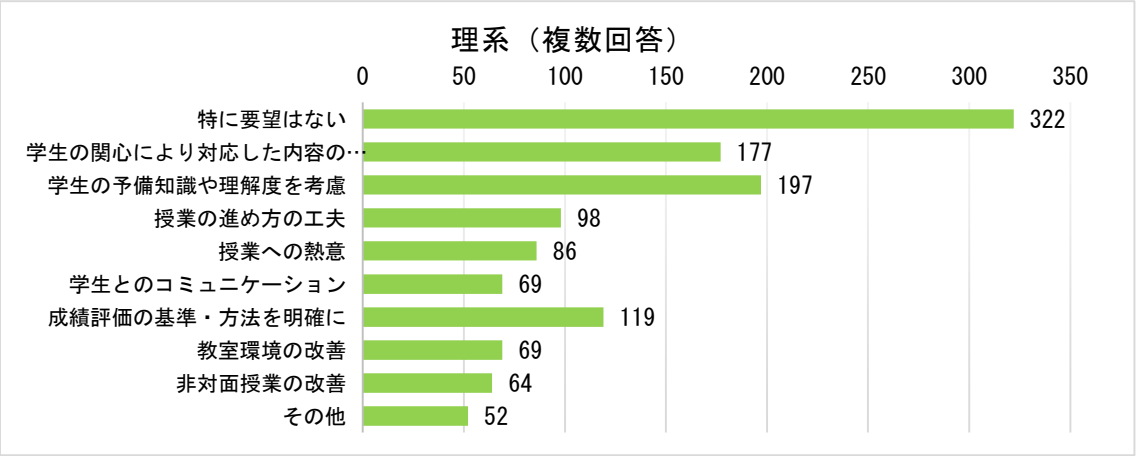
⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）を改善してほしい

⑩その他（Q.48 で回答）

＜図 42　全学共通科目の改善要望（複数回答）＞







Q.46　Q.45 で選択したもののうち、最も重要なものを選んでください。

①特に要望はない　②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい

③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい　④授業の進め方をもっと工夫してほしい

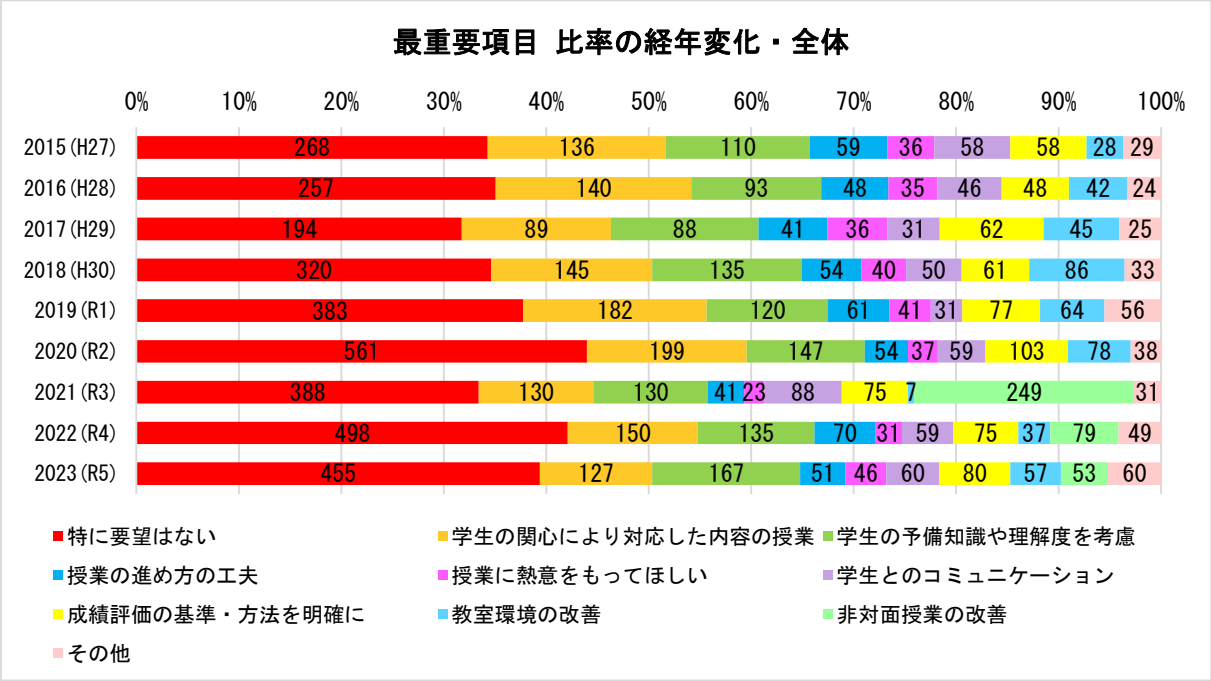
⑤授業にもっと熱意をもってほしい　⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい

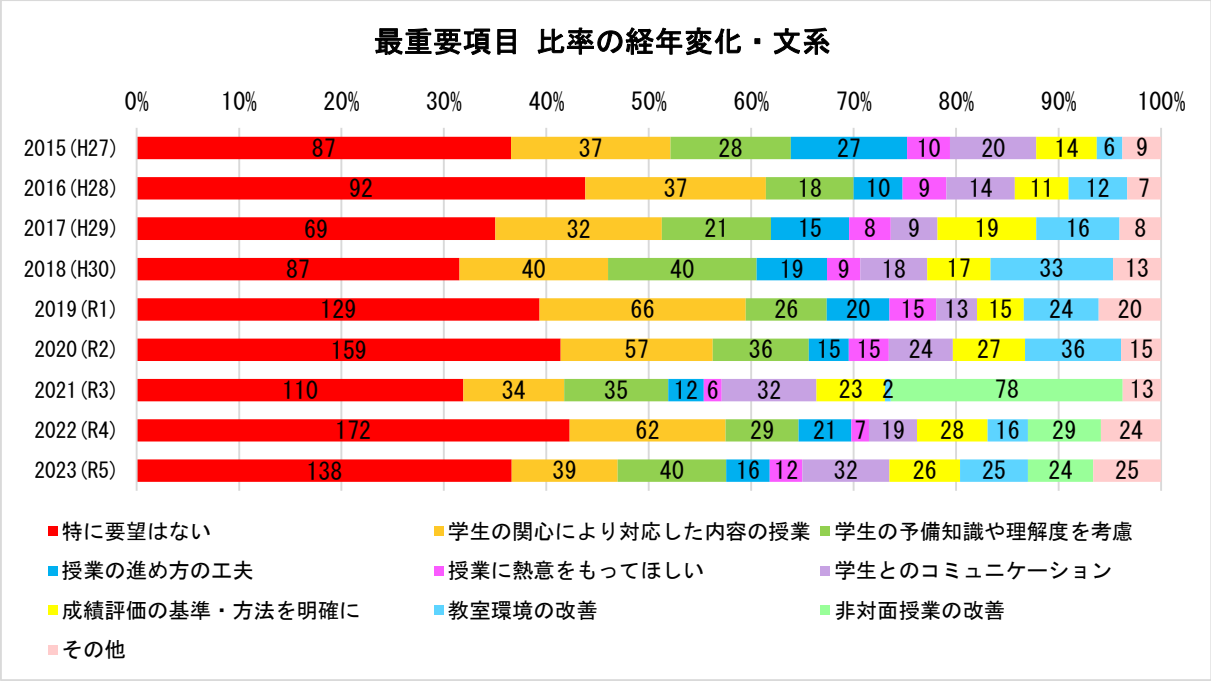
⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい　⑧教室環境(設備・広さなど）を改善してほしい

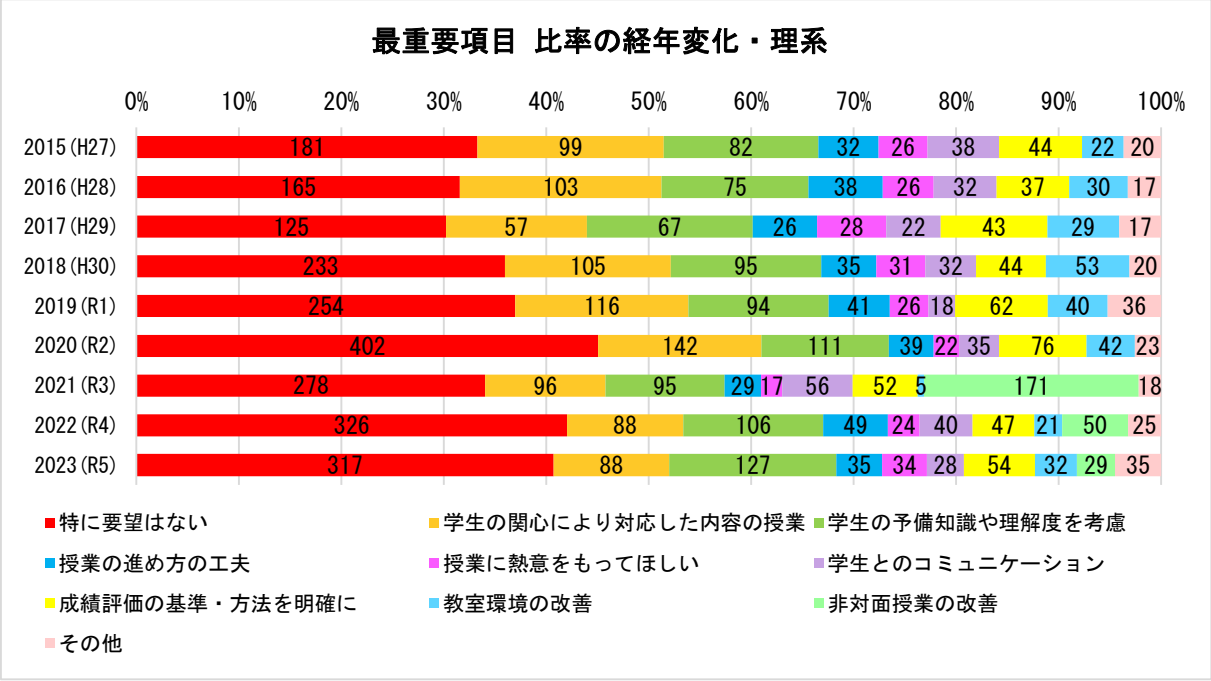
⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）を改善してほしい

⑩その他

＜図 43　全学共通科目の改善要望（最重要項目）＞







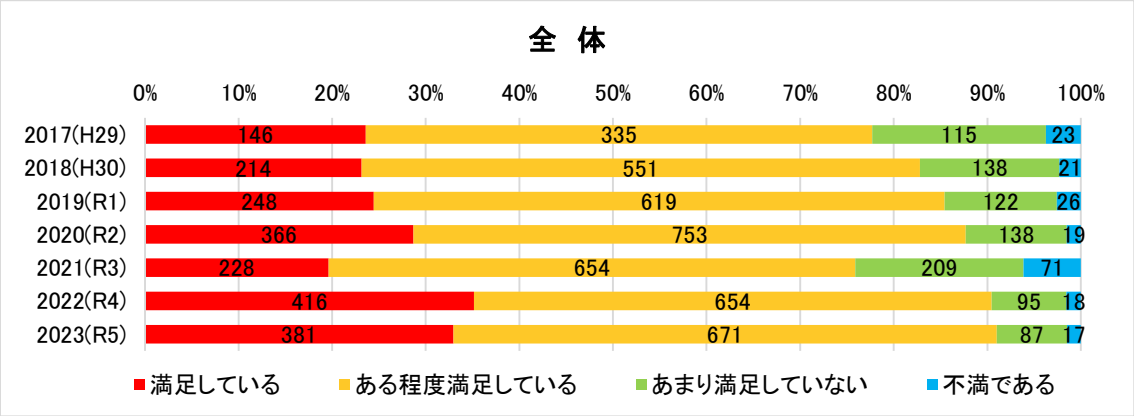
この項目についても毎年質問して、経年変化をみている。ただし、一昨年より⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）の項目を追加した。図 42 は改善要望を複数回答で尋ねた結果の度数分布を示している。全体としては①「特にない」の回答数がもっとも多く、②「学生の関心により対応した内容の授業」と③「学生の予備知識や理解度をもっと考慮」が続いている。一昨年は一位の①と同程度あった⑨「非対面授業の改善」が 8 位に減少した。

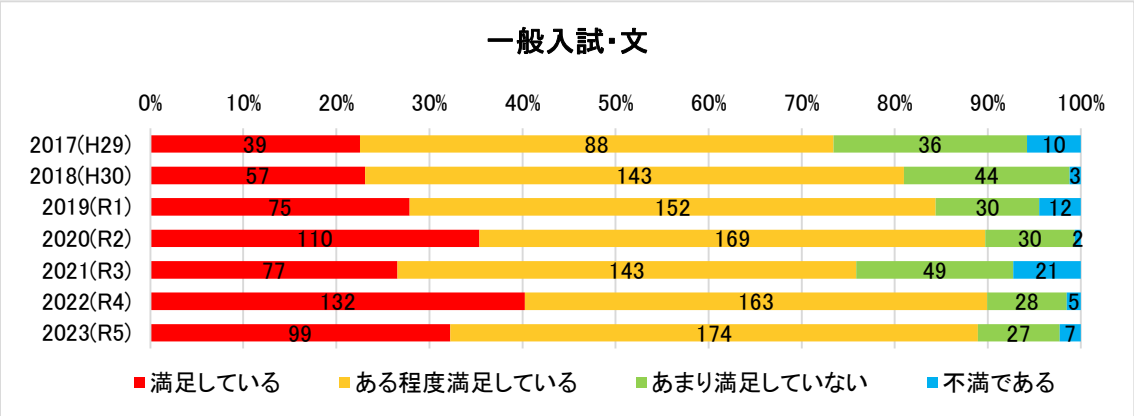
図 43 は、要望の中で最重要な項目と指摘された項目の割合を、2015 年から 9 年間について図示したものである。全体をみると、「特に要望はない」が約 40%である。年を追って増加傾向にあったのが、一

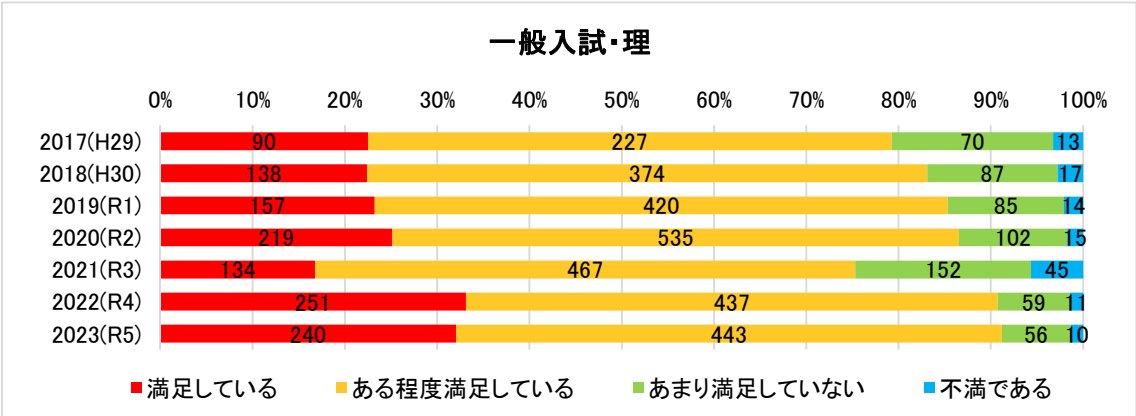
昨年はコロナ禍の影響で 10%ほど減少したが、昨年今年はおよそ以前の値に戻っている。最重要項目としては「学生の予備知識や理解度をもっと考慮」が一番多く、次いで「学生の関心により対応した内容の授業」となっている。

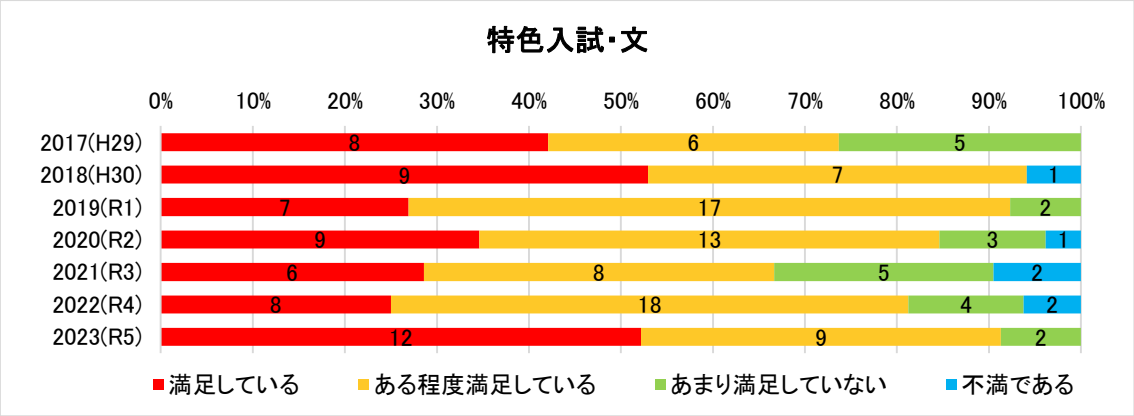
Q.47　この１年間に受けた全学共通教育を総合的に判断して、学んだことに満足していますか。
①満足している　②ある程度満足している　③あまり満足していない　④不満である

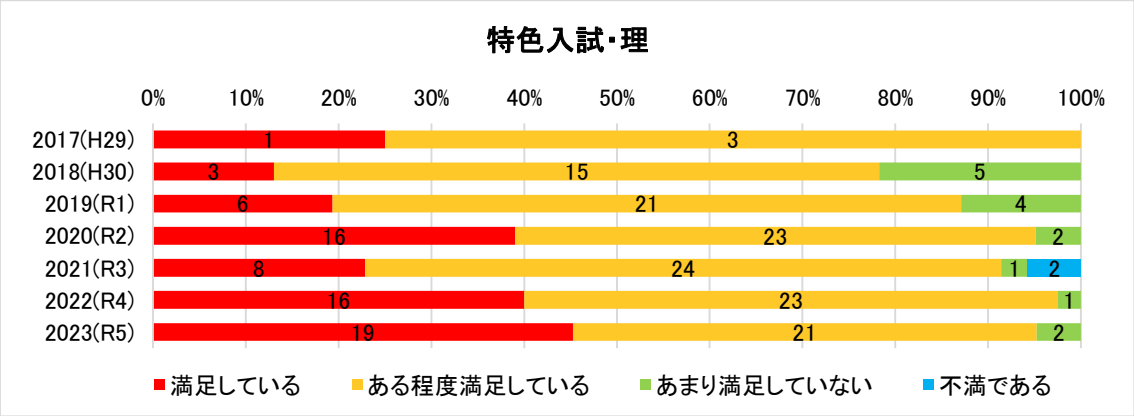
＜図 44　総合的満足度＞

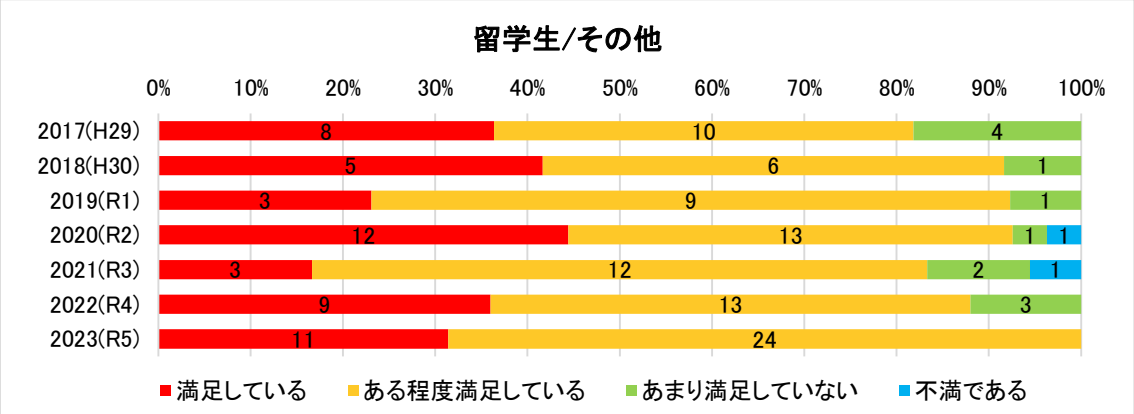












アンケートの最後に、１回生の１年間に受けた教養・共通教育を振り返っての満足度を尋ねた。図 44 には、全体の結果とともに入試区分別に 2017 年度からの 7 年間の結果を比較して記載した。コロナ禍の 2021 年度を除くと、肯定的回答が増加する良い傾向が続いている。全体では、「満足している」＋「ある程度満足している」の肯定的意見が 2 年続けて 90%を超えることになった。特色入試や留学生の区分では回答数が少なく有意の傾向を把握しづらいが、肯定的意見で見ると何れも全体と同様の高い値を示している。

次に、学生の満足度に影響を与える因子を検討するため、他の質問項目との関連を調べて表 5 に掲載した。この解釈にはいろいろな見方ができるが、高い満足度を与える項目（満足度の全体平均値は 2019 年度より 3.07→3.14→2.89→3.24→3.24 と推移している）と、関連を調べた各項目で回答①→④（⑤）の高位群→低位群により満足度が明確に減少する項目に着目した。このような観点からすると、予想通

り「学習意欲」がもっとも顕著（3.49）であり、「意欲」、「GPA」、「納得度」の 3 項目では、高位の①で 3.49~3.41 の高い満足度を示し、かつ下位の群になるに従って、明確に満足度が低下していく。これらの項目の基盤となっているであろう「志望」の項目においても差は小さくなるものの同様の傾向が見られる。一方、「正課授業時間」の項目とは相関が弱いという結果である。

志望に裏打ちされた強い学習意欲が学習行動を伴って満足度に繋がり、高い GPA 成績や単位数が結果に対する満足度をもたらすということは予想できることであるが、続いて「成績評価に対する納得度」も学生が満足感を得るために効果をもつことが認められた。

前章で述べたように、学生の意識としては 2 回生進級時の「期待実現度」や「満足度」が記憶に残り、卒業時アンケートにおける全学共通教育での向上感、ひいては大学生活を通じての全学共通教育に対する最終評価に繋がるものと思われることから、重要調査項目として継続して注視していきたい。

満足度の平均値 ＝（4 x ①満足している+3 x ②ある程度満足している+2 x ③あまり満足していない +1 x ④不満である）／全回答者数

＜表 5　各項目の分類①～④（⑤）毎の満足度の平均値＞

	志望 Q.04	一致度 Q.06	意欲 Q.09	単位 Q.23	GPA Q.30	納得度 Q.32	正課授業 Q.37	授業外学習 Q.38
①	3.32	3.38	3.49	3.24	3.45	3.41	3.25	3.35
②	3.29	3.19	3.27	3.19	3.36	3.12	3.30	3.33
③	3.22	3.01	3.14	3.16	3.23	2.90	3.30	3.16
④	3.03	3.00	3.00	3.14	3.19	2.75	3.16	3.11
⑤			2.79	2.97	3.17		3.03	3.03

注）満足度の平均値は　3.24、表中①～④（⑤）の回答群の意味は以下に記載の通り

Q.04 志望（現在）（①：はっきり決めている、②：大まかには決めている、③：いくつかあったが、どれとは決めていない、④：あまり決めていない）

Q.06 一致度（現在）（①：よく一致している、②：まあ一致している、③：どちらかというと一致していない、④：あまり一致していない）

Q.09 意欲（後期開始時）（①：非常に意欲あり、②：まあまあ意欲あり、③：どちらともいえない、④：あまり意欲なし、⑤：まったく意欲なし）

Q.23 単位数（①：単位≧65、②：65＞単位≧60、③：60＞単位≧55、④：55＞単位≧50、⑤：50＞単位≧40）

Q.30 GPA（①：GPA ≧4.0、②：4.0＞GPA≧3.5、③：3.5＞GPA≧3.0、④：3.0＞GPA≧2.5、⑤：2.5＞GPA≧2.0）

Q.32 成績納得度（①：納得している、②：どちらかといえば納得している、③：どちらかといえば納得できない、④：納得できない）

Q.37 正課授業時間（①：6.0h 以上、②：5.0～5.5h、③：4.5h、④：3.0～4.0h、⑤：2.5h 以下）

Q.38 授業時間外学習時間（①：3.0h 以上、②：2.0～2.5h、③：1.5h、④：1h、⑤：0.5h 以下）

１２．まとめ

２回生進級時アンケートは、入学後１年間の大学生活を経て、学生諸君がどのような学習を行い、どのような意識をもっているかを把握して、教養・共通教育の改善に役立てることを目的としている。従来のアンケートの一部を継承して経年変化の追跡を可能にしながら、入試種別、学部別の解析群を設定し、全学、文系、理系の括りの他、必要に応じてより細かな解析区分を採用することにより、結果をもたらした要因についての手がかりを得る形式にしている。また、アンケート結果の解析においても、教育改善のためのデータを得るという観点を強く意識した。毎年の結果は、多くの点で同様の傾向を示しているが、学生の学習動向や生活実態には大きな慣性があり、年により大きく変化することはない。しかし、近年のCAP 制の導入・変更や英語教育の改革などに伴う学習行動や意識の変化傾向を把握することは、今後を予測するために重要であり、それにも増して、教育的な問題点を把握し更なる改善のきっかけを掴むために重要である。

COVID-19 感染症の世界的流行による非対面授業への移行などを通して 2021 年度のアンケート調査結果は種々の項目で影響を受けており、その概要は昨年度の報告書にまとめたとおりである。昨年度今年度の結果はどの項目もおよそ以前の状況に戻っており、本報告書ではほとんどの感染症関連影響評価の記述を省略した。それらに関しては 2022 年度の 2 回生進級時アンケート報告書（京都大学国際高等教育院紀要第 6 号；2023）を参照していただきたい。

アンケートの設問をする段階で想定していたように、

志望意識 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習成果 → 向上感（満足度）

の正の連鎖は、今回の結果を見ても確かに成立している。教育効果の向上を図るためにはこの正しい流れを維持し拡大する施策を行うとともに、問題点を早期に把握して負の連鎖になる芽を摘み取る努力がもとめられる。本年度のアンケート結果からは、次のような点を指摘できる。昨年度までと共通の点が多数あるが、今年度の特徴も加えて以下に列挙する。

・入学時、将来活躍したい分野（志望）についての学生意識は学部により大きな差があるが、入学後のさまざまな経験から次第に自身の将来像が明確になる傾向が見られる。それに伴い志望意識と専門との一致度も次第に改善している。しかしながら入学後の学習意欲の低下は相変わらず深刻である。各学部で教育体系、カリキュラムの再点検をされるとともに、将来に向けたキャリアパスや学習の動機付けとなる情報を、入学前のみならず入学後にも学生対して積極的に提供されることが必要である。

・特に新入生にとって、生活環境や大学での学び方が激変し、各学部での履修指導ガイダンスや１回生前期のカリキュラムが、学習意欲に強い影響を与えていることが推測される。今年の調査でもすべての学部で２回生進級時の学習意欲に回復がみられたことは好ましい傾向である。各学部で進級時ガイダンスに力を入れていただいた効果と推察している。

・外国人教員による英語授業、E 科目の設定等、英語教育の改革が進められているにも関わらず、英語能力に向上感をもてない学生が全体の 6 割以上を占める。2016 年度改革後の向上感の増加は限定的であり、ここでもう一度教養・共通教育の英語科目カリキュラムを見直して、英語への関心や英語に触れる機会を増加させることにより、向上感・達成感が得られる仕組みをさらに検討することが必要である。

・ILAS セミナーは例年高い評価を得ている。すでに、全学の教員の協力を得て、2023 年度の前期は 235 科目が開設されているが、全体の約 2 割を占める英語科目 ILAS Seminar-E2 を含めて、今後はより新入生に魅力あるテーマを設定するよう努めていくことが大事であろう。また、予備登録をしたが履修しなかった、あるいは、そもそも予備登録をしなかった学生がそれぞれ 2 割近くいるので、入学時に「京都大学での学び」の始まりとしての ILAS セミナーをアピールし、少人数教育の意義を理解してもらう必要がある。新入生向けパンフレットやセミナー紹介動画、講師向け授業実践ガイドなどを作成・配布して、それぞれの意識を高めていく努力を続けたい。

・2020 年度から強化された CAP 制度の定着により 1 回生で過剰な単位を取得する状況は徐々に改善されてきているが、要卒単位の半分近くの 60 単位以上を文系 17%、理系 34%の学生が 1 年間で取得するという事態であり、依然として単位を取り過ぎの状態にある。卒業単位数、標準修業年数からみても異常状態にあり、カリキュラム、履修指導、要卒単位の再検討が必要である。機関別認証評価においても、「履修登録科目に関する単位の上限の設定（CAP 制）等について、適切であるか」が問われているように、各科目で学生自ら考察を深め、授業で得た知識を定着させる学習時間の確保が求められている。

・成績評価について、評価基準の透明性、公平性をもとめる声が、特に理系学生で大きい。成績評価の方法を明示し、クラス間・科目間の不公平感を改善することが求められる。これは GPA 制度の導入が教育改革に資するとされた主要な論点の一つであることを改めて認識するべきである。

・１回生で運動時間が不足している学生が多く、健康管理について新入生ガイダンス等でより強くアピールすることが必要である。また、本学の環境や運動施設は貧弱と言わざるを得ない。一般学生が手軽に運動を楽しめる環境の整備が望まれる。

・かねてから言われているように、授業外学習時間が 1 科目当たり 0.8 時間と明らかに不足している。受講科目数や取得単位数を増加させることよりも、自ら学ぶ姿勢を喚起する授業を推進することが、教育の量から質への転換を促し、教育効果を上げる道筋になると思われる。

・教養・共通教育への満足度は、「学習意欲」と「成績」のみならず、「成績評価への納得度（信頼性）」から形成されている。教育改善の議論においては、この点にも注意を払うべきである。

・Q.48 で述べられた改善要望において、履修登録、定員制限と抽選についての意見が多数寄せられた。教育効果を考えるとクラスサイズが過大にならないように一定の定員を設けることは避けられないが、不満を招く一つの大きな要因は、いわゆる楽勝科目という風評により履修希望者が一部科目に殺到し、本当にその科目を受講したい学生が履修できないという事態にある。各授業の到達目標の設定と成績評価の在り方、授業外学習の組み入れ等、教育システムとしての問題点を全教員が共有し、共通の認識の下に改善に取り組むことが要望されている。また、学生諸君に対して施策の意図を伝えて理解を得る努力が求められる。

「第 5 章 大学教育での向上感」において設けた Q.12~Q.17 の質問は、各学部におけるカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに関連する内容である。 2 回生進級時アンケートは入学後の一つの通過点でのモニターという位置づけにあるが、2017 年度卒業生から卒業時アンケートにおいて、いくつかの項目でこれらとのリンクを可能にし、大学 4 年間の総括としての教養・共通教育の効果を分析できるようにした。これらの結果によると、「専門以外の幅広い知識と教養」や「専門分野で基礎となる学力」の向

上感に対する肯定的回答率は、それぞれ、2 回生進級時には 86%、76%であり、卒業時においては 84%、89%であった。また、この 2 回生進級時アンケート Q.44「全学共通科目に対する期待の実現度」では 76%、Q.47「総合的満足度」においても 91%の肯定的意見が得られた。このように、2 回生進級時における教養・共通教育に対する満足度が卒業時においても保持され、大学生活全体を通じた印象、評価に繋がっていることが示唆された。このことに留意して継続した改善努力が求められる。

今後は、本アンケートで示唆された重要項目について、教務データ等のより正確な資料をもとに検証した上で、アンケートの指摘が事実であれば具体的な対策が講じられるように切に願うものである。今年も学部の進級時ガイダンスにて本アンケートに協力をお願いした。また学部とともに教育院関係者にもご努力をいただき、近年の回答率を維持することができた。これらのご協力に改めて感謝したい。

最後に、長文のアンケートに耐えて回答し貴重なデータを提供していただいた学生諸君に厚く御礼を申し上げる。また、膨大なデータを的確に、工夫を凝らして解析していただい国際高等教育院事務部の皆様に感謝を申し上げたい。

2023 年度　2 回生進級時アンケート（2022 年度入学生）
（実施期間：2023/04/03 - 2023/06/09）

・実施要項（PDF ファイルにて表示、以下内容）
＊本アンケートは記名式で行います。
＊有効回答のなかから抽選で粗品を進呈いたします。
＊回答結果は、個人が特定できる形での公表はしません。
＊なお、学生番号と氏名は大学から当選者への連絡・確認に使用します。
＊本調査は、入学後 1 年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか、について 2 回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実するための基礎資料にすることを目的としています。
＊あなたの昨年度 1 年間を振り返って回答してください。

Q.01　あなたが京都大学に入学した入試区分を選択してください。
①一般入試（文系）　②一般入試（理系）　③特色入試　④外国人留学生特別選抜　⑤その他

Q.02　あなたの学部を教えてください。
①総合人間学部　②文学部　③教育学部　④法学部　⑤経済学部　⑥理学部　⑦医学部（医学科）
⑧医学部（人間健康科学科）　⑨薬学部　⑩工学部　⑪農学部

Q.03　あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていましたか。
①はっきり決めていた　②大まかには決めていた　③いくつかあったが、どれとは決めていなかった
④あまり決めていなかった

Q.04　今現在、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていますか。
①はっきり決めている　②大まかには決めている　③いくつかあるが、どれとは決めていない
④あまり決めていない

Q.05　入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。
①変わっていない　②変わった

Q.06　現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。
①よく一致している　②まあ一致している　③どちらかというと一致していない
④あまり一致していない

Q.07　入学当初から現在までに、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。各時期について、次の 5 つから選択してください。なお、この質問は Q.7〜Q.11（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）まであります。
＜入学当初の時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.08＜前期半ばの時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.09＜後期開始の時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.10＜後期半ばの時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.11＜現在＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.12　入学後 1 年間の授業を受けて、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.13　1 年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.14　1 年間で、あなたの専門分野で基礎となる学力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.15　1 年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.16　1 年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.17　1 年間で、あなたの英語の能力（英語以外の言語を第一外国語とした方は、その言語の能力）はどの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.18　1 回生で ILAS セミナーを履修しましたか。
①履修した　②予備登録をしたが履修しなかった　③予備登録をしなかった

Q.19　Q.18 で「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。
①とても満足している　②どちらかというと満足している　③どちらかというと満足していない
④満足していない

Q.20　Q.18 で「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。
①抽選に外れてしまった　②希望順位の低い科目だったのでやめた　③履修できない曜日・時限だった
④何度か授業に出たが興味をもてなかった　⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
⑥その他（記述回答）
備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.21　Q.18 で「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかった理由は何ですか。
①履修したいと思わなかった　②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
③予備登録に間に合わなかった、または忘れた　④忙しくて履修できそうになかった
⑤その他（記述回答）
備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.22　スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習 I・II・III、地球科学実験のうち、１回生で履修した科目の□欄にチェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へ進んでください。
□スポーツ実習 IA　□スポーツ実習 IB　□物理学実験　□基礎化学実験　□生物学実習 I
□生物学実習 II　□生物学実習 III　□地球科学実験

Q.23　あなたは 1 回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1 回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。
①単位≧70　②70>単位≧65　③65>単位≧60　④60＞単位≧55　⑤55＞単位≧50
⑥50＞単位≧45　⑦45＞単位≧40　⑧40＞単位≧35　⑨35＞単位≧30　⑩30＞単位≧25　⑪25＞単位

Q.24　Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「前期」の取得単位数はどれくらいですか。
①単位≧40　②40>単位≧35　③35>単位≧30　④30＞単位≧25　⑤25＞単位≧20
⑥20＞単位≧15　⑦15＞単位

Q.25　Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「後期」の取得単位数はどれくらいですか。

①単位≧40　②40>単位≧35　③35>単位≧30　④30＞単位≧25　⑤25＞単位≧20
⑥20＞単位≧15　⑦15＞単位

Q.26　1 回生の間に単位を取得した科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。次の科目群別にお答えください。なお、この質問は Q.26〜Q.29（人社、自然、外国語（英）、外国語（初））まであります。
「人文・社会科学科目群」の科目について
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.27　「自然科学科目群」の科目について
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.28　「外国語科目群」の［英語科目］について
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.29　「外国語科目群」の［初修外国語科目］について
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.30 あなたの 1 回生（前期＋後期）終了時の GPA はどのレベルですか。1 回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください。
①GPA ≧4.0　②4.0＞GPA≧3.5　③3.5＞GPA≧3.0　④3.0＞GPA≧2.5　⑤2.5＞GPA≧2.0
⑥2.0＞GPA≧1.5　⑦1.5＞GPA

Q.31 あなたが 1 回生後期（2022/12/3、12/17）に受けた TOEFL-ITP のスコアはどのレベルでしたか。
①スコア≧550　②547≧スコア≧503　③500≧スコア≧450　④447≧スコア　⑤受験していない

Q.32　1 回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします。全体として自分の成績評価に納得していますか。
①納得している　②どちらかといえば納得している　③どちらかといえば納得できない
④納得できない

Q.33　Q.32 で「どちらかといえば納得できない」又は「納得できない」を選んだ方へ：成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものの□欄にチェックをつけてください。
①成績評価が厳しすぎる　②成績評価が甘すぎる
③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった
④成績評価の基準や方法が不公正である　⑤その他（記述回答）
備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.34　Q.33 で選んだもののうち、最も重要なもの 1 つを選択してくだい。

①成績評価が厳しすぎる　②成績評価が甘すぎる
③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった
④成績評価の基準や方法が不公正である　⑤その他

Q.35　平均して 1 週間に何時間程度、運動（スポーツ、散歩、ジョギング、サイクリング等）をしていますか。
①ほぼ 0 から 1 時間程度　②2～3 時間程度　③5 時間程度　④7 時間程度　⑤10 時間程度
⑥15 時間程度　⑦20 時間程度　⑧25 時間程度　⑨25 時間以上

Q.36　あなたは、１回生のときに運動系のクラブやサークルに入っていましたか。
①入っていた　②一時、入っていたが止めた　③入っていない

授業期間中のあなたの平均的な一日（休祝日を除く月曜日～金曜日）における、Q.37~Q.42 の活動時間を教えてください。なお、活動時間の項目は、＜正課の授業出席時間＞＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞＜通学時間＞＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞＜アルバイトの時間＞　です。ただし、ここでは便宜的に、非対面授業のオンライン・オンデマンド型は＜正課の授業出席時間＞に、課題研究型は＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞に加えてください。

Q.37 ＜正課の授業に出席する時間＞（1 コマの授業は 1.5 時間です）

Q.38　＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞

Q.39　＜往復の通学に要する時間＞

Q.40　＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞

Q.41　＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞

Q.42　＜アルバイトに要する時間＞

Q.43　授業期間中のあなたの平均的な週末（土曜・日曜）において、授業の予習・復習・レポート作成等に費やす時間があれば、土曜・日曜の合計時間を答えてください。

Q.44　全体として、あなたが全学共通科目に対して抱いていた期待は実現されましたか。
①実現された　②どちらかといえば実現された。
③どちらかといえば実現されなかった。　④実現されなかった。

Q.45　今後の全学共通科目に対して、どのような改善を要望しますか。次の中からあてはまる全てのものの□欄にチェックをつけてください。
①特に要望はない　②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい　④授業の進め方をもっと工夫してほしい
⑤授業にもっと熱意をもってほしい　⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい　⑧教室環境(設備・広さなど）を改善してほしい
⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）を改善してほしい
⑩その他（具体的な内容は Q48 にて回答してください）

Q.46　Q.45 で選択したもののうち、最も重要なもの１つを選択してください。
①特に要望はない　②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい　④授業の進め方をもっと工夫してほしい
⑤授業にもっと熱意をもってほしい　⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい　⑧教室環境(設備・広さなど）を改善してほしい
⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）を改善してほしい
⑩その他（具体的な内容は Q48 にて回答してください）

Q.47　この１年間に受けた教養・共通教育を総合的に判断して、学んだことに満足していますか。
①満足している　②ある程度満足している　③あまり満足していない　④不満である

Q.48　最後に、今後の教養・共通教育の改善点や要望があれば、要点を簡潔に記入してくだい。良かったこと、感動したこと、印象等でも結構です（自由記述・500 文字制限）。
備考：質問はここまでです。ご協力ありがとうございました。

2023（令和 5）年度 2 回生進級時アンケート報告書

令和 6 年 3 月　発行

編集　　京都大学国際高等教育院

発行　　京都大学国際高等教育院

〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町
Tel 075-753-6690/6513